

峰 畑 遺 跡

第 5 次調査

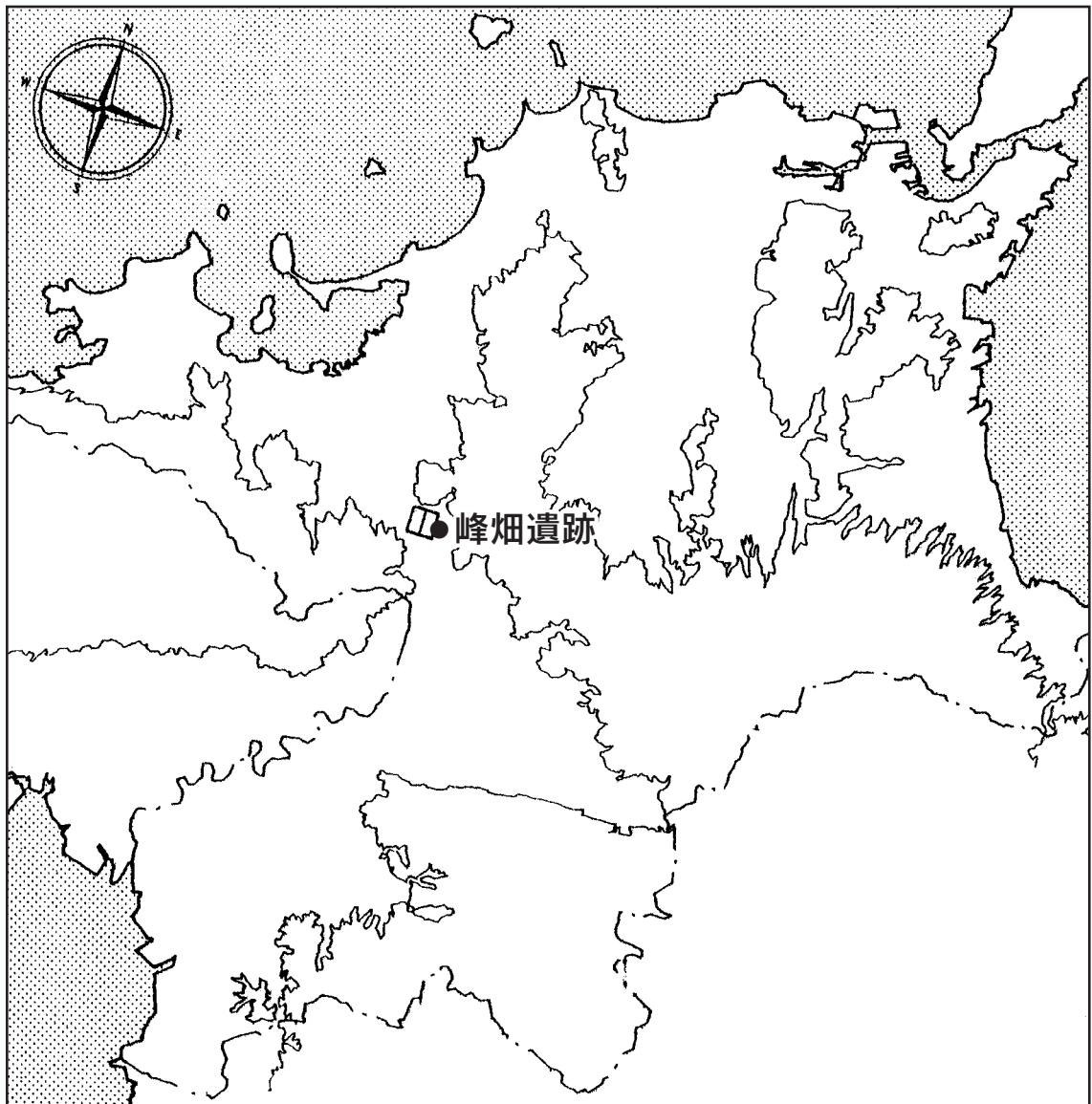
筑紫野市文化財調査報告書

第 93 集

2 0 0 9

筑紫野市教育委員会

峰 烟 遺 跡



例 言

1. 本書は供養塔建設に伴い筑紫野市教育委員会（当時社会教育課文化財担当）が、平成11年度に発掘調査を実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宗教法人正行寺の委託を受けて筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 開発対象地は筑紫野市大字二日市北1丁目464番地1外、開発対象面積823㎡で調査対象面積は308㎡である。
4. 試掘調査および本調査に至るまでの業務は、渡邊和子（文化財担当技師）が行った。
5. 調査に係る個別遺構の実測および写真撮影は渡邊が行い、全体の遺構測量については㈱東亜建設技術に写真測量を委託した。
6. 全景写真および遺物写真についてはフォトハウスOKA（当時）に委託し撮影した。
7. 報告にあたっては、遺構の性格付けを行い、溝状遺構をSD、土坑はSK、墓をST、製鉄遺構関連をSRの略号とし、番号については、遺物取り上げの番号をそのまま付した。
8. 遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
9. 本書で示す土層や遺物の色については、農林水産省水産技術会・(財)日本色彩研究所監修「新版 標準土色帳」を基準とし、古代の遺物の時期区分については、下記の文献を参考にした。
「大宰府条坊跡Ⅱ」太宰府市の文化財第7集 太宰府市教育委員会 1983
10. 挿図中に使用した方位はすべて日本測地系の座標北を指し、磁北を示す場合は挿図中にG.Nを記している。
11. 報告書作成に係る遺物実測は、一部を渡邊が、他を㈱タクト・㈱埋蔵文化財サポートシステムに、また製図は一部を渡邊が、他は㈱タクトに委託した。
12. 本書の執筆・編集は渡邊が行った。

目 次

本 文

	頁		頁
1. 調査に至る経過 2. 位置と環境	3	④ST (墓)	21～28
3. 調査の内容	4	⑤Pit	29
①SX (性格不明遺構)	5～13	⑥横口付木炭窯	30～34
②SD (溝)	14～15	⑦SR (鍛冶炉)	35～43
③SK (土杭)	16～21	4. まとめ	44

F i g . (挿図)

Fig.1 周辺遺跡分布図(S1/20,000)	1	Fig.13 S T分布図(S1/300)	21
Fig.2 周辺地形図(S1/2,500)	2	Fig.14 ST実測図及び出土遺物実測図	
Fig.3 遺構配置図(S1/100)	折込	(S1/30・1/3)	22
Fig.4 SC実測図(S1/60)	6	Fig.15 ST出土遺物実測図(S1/4)	24
Fig.5 SC実測図及び出土遺物実測図 (S1/60・1/4) 8		Fig.16 ST38・49実測図(S1/30・1/40)	26
Fig.6 SC23実測図及び出土遺物実測図 (S1/60・1/3・1/4) 10		Fig.17 Pit実測図及び出土遺物実測図 (S1/30・1/3) 28	
Fig.7 SC実測図(S1/60)	12	Fig.18 窯実測図及び土層図(S1/30)	31
Fig.8 出土遺物実測図(S1/3・1/4)	13	Fig.19 SR関連遺構分布図(S1/300)	35
Fig.9 SD位置図(S1/200)	14	Fig.20 SR実測図-1(S1/20)	36
Fig.10 SD出土遺物実測図(S1/3・1/4)	15	Fig.21 SR34出土遺物実測図(S1/3)	39
Fig.11 SK実測図(S1/30)	17	Fig.22 SR実測図-2(S1/20)	40
Fig.12 SK実測図及び出土遺物実測図(S1/30・1/3) 19		Fig.23 SR実測図-3(S1/20)	42
		Fig.24 ST49設計想定図及びSR34・63実測図 (S1/20・1/40) 45	

P L . (写真図版)

PL.1 全景	3	PL.14 出土遺物	24
PL.2 調査区北側近景	4	PL.15 ST	25
PL.3 SC10周辺近景	5	PL.16 ST49	27
PL.4 SC	7	PL.17 出土遺物	29
PL.5 出土遺物	9	PL.18 横口付木炭窯	32
PL.6 出土遺物	10	PL.19 横口付木炭窯	33
PL.7 SC24・25	11	PL.20 横口付木炭窯	34
PL.8 出土遺物	13	PL.21 SR32	37
PL.9 SD及び出土遺物	15	PL.22 SR34	38
PL.10 SK	18	PL.23 SR出土遺物	39
PL.11 出土遺物	20	PL.24 SR	41
PL.12 ST	23	PL.25 SR	43
PL.13 出土遺物	24		



Fig.1 周辺遺跡分布図 (S 1/20,000)



Fig.2 周辺地形図 (S 1/2,500)

1. 調査に至る経過

平成11年7月25日付けで筑紫野市大字二日市北1丁目464番地1外における開発の協議があった。予定地は周知の遺跡包蔵地内であり筑紫野市教育委員会（以下市教育委員会）では工事計画の内容から事前の試掘・確認調査の実施を指導した。事前の指導に基づき、宗教法人正行寺（以下正行寺）より文化財所在について同年8月30日に市教委に照会があった。市教育委員会では9月3日に試掘・確認調査を実施し、対象地の一部に遺跡が存在していることが分かり、この結果報告とともに発掘調査について正行寺と協議を行い、平成11年9月13日付で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結した。平成11年10月4日より調査を開始し11月31日で完了した。

2. 位置と環境

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中間に位置する。市の東西にある筑紫山地と背振山地間の最も低い位置は阿蘇4火砕流の主たる流路であり、それが狭長な二日市平野として今に至る。平野部に面する台地や低丘陵部は阿蘇4火砕流によって形成され、これらには数多くの遺跡が存在する。峰畑遺跡は、この火砕流丘陵の最北部にあって太宰府市との市境に近く、標高50～60m、比高差10m前後を測る。ここは昭和61年より6次にわたる調査が行われている。本報告の調査地点は、1～4次調査の実施された丘陵東側の小さな谷を挟んだ斜面部に所在する。



PL.1 全景



PL.2 調査区北側近景

3. 調査の内容

峰畑遺跡第1～4次調査では、遺跡の時期の主体は弥生時代であったが、5次調査では弥生時代の遺構は、検出されていない。

検出された遺構は、竪穴住居跡(SC)13棟、墓(ST)10基、溝状遺構(SD)25条、土坑(SK)24基、小鍛冶炉(SR)13基、横口付木炭窯1基で古墳時代以降の遺構が主体となる。

特に小鍛冶炉については、1～4次調査においても検出されているが、今回は近接して小規模ながら炭窯も構築されていた事から周辺には生産遺跡が存在した可能性を示唆している。

さらに墓は、土坑墓が主体だが、特異な形態の墓が検出されたことも特徴となる。

①SC(竪穴住居跡) (Fig.4～8, PL.3～8)

SC3は調査区の東側にあつて、SD2・6・7、SK14・18に切られている。西側コーナー部分をSK14に切られるが、北壁約4.5m、西壁2.1+ α m、東壁3.1m+ α を測る。遺存する壁の立ち上がりは、三方ともやや斜めとなる。壁の深さは残りの良い東壁側で23～31cmを測る。床面は平坦で踏みしめや貼床は遺存しない。床の北側には深さ4cmほどの壁溝があり東・西壁に延びているが南壁にもあったかどうか現状では分からない。住居自体の形状は方形あるいは長方形が想定される。遺物は摩滅した弥生土器片、鉄滓の小片、須恵器の碎片、土師器片が出土した。図示できたのは土師器の甕胴部片Fig5-1だけである。色調は内外ともに褐灰色10YR6/1を呈し、胎土には1～3mmの小礫を多く含んでいるが、焼成は良い。調整は内面胴部にケズリ、外面はハケによる調整が施されている。口縁部を欠失しているが、概ね7世紀代の所産と思われる。

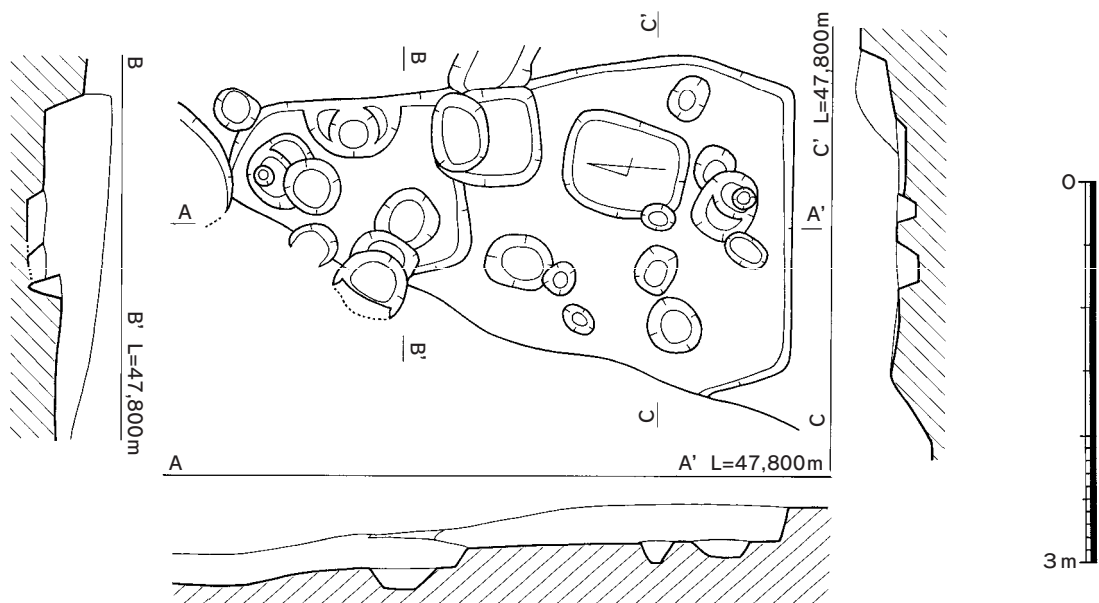
SC10は、SC17の西側にあつてSK22を切るが、ST9、SD16・52、SD7に切られる。壁は北・東側と南壁の一部が残る。北壁は長さ4.2mで直線ではなく緩く曲がる。東壁は2.1mで直線となる。いずれも壁の深さは18～28cmを測り、形状は不整な方形もしくは長方形を呈していたと思われる。床面は平坦で汚れが著しい。須恵器・弥生土器片・鉄滓が出土。**Fig.6-5**の須恵器蓋は大宰府編年IA期のものと考えられる。

SC11、SC17の南側にある。ST15とSC13に切られ、不整な方形の形状を呈していたと思われる。床面は平坦だが高低差があり二段の床となる。西側の低い床面は踏みしめ状況が著しく、東側の高い床面には汚れや踏みしめが見られず、住居を拡張したのか、遺構が重複している可能性も考えられたが、埋土の状況から同一とした。遺存する壁の深さは南側で9cm、北側20cmを測る。遺物は碎片だけの出土で、時期決定できるものや図示できるものは出土していない。

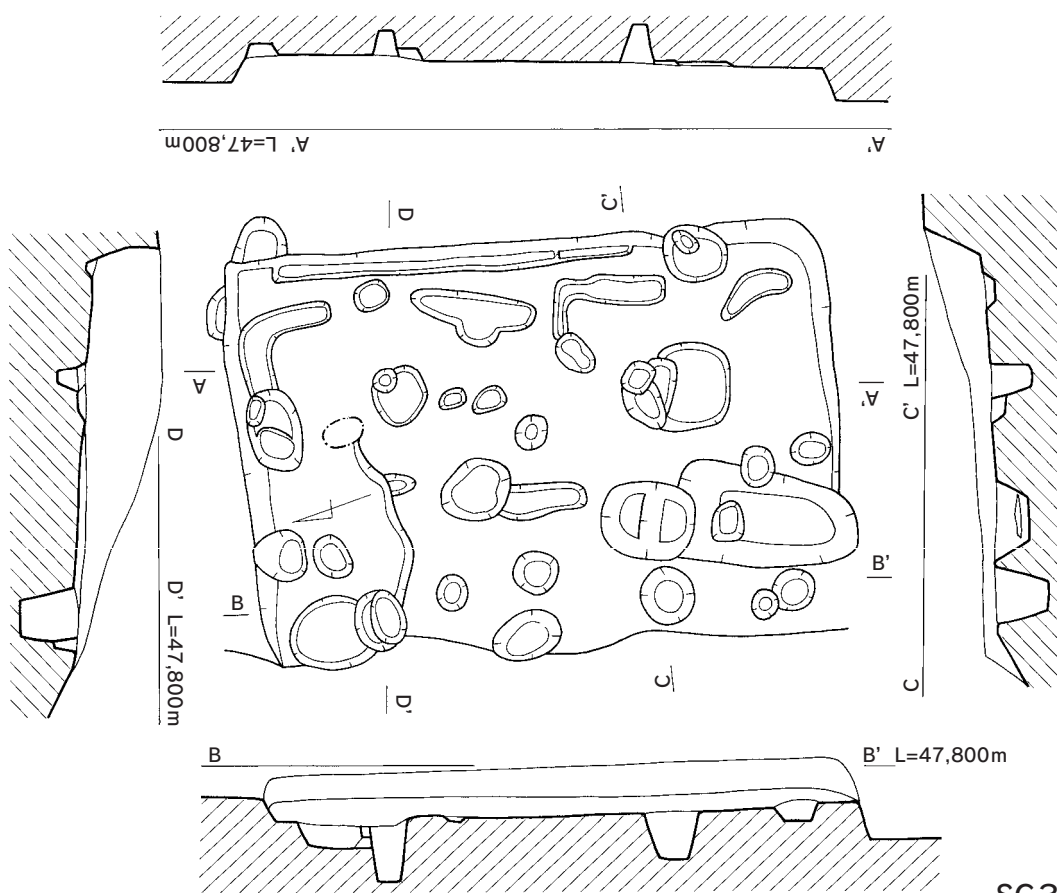
SC13は、SC10の北側にあり、SC11・23、ST15に切られる。西壁は長さ3.45mで、カクランの溝により切られていて本来の高さではないが、深さ20cmを測る。東壁は2.2mの長さ、深さは9cmしか遺存しない。遺存する壁の立ち上がりは直に近い。床面は平坦で踏みしめによる汚れが著しく、形状は方形もしくは長方形のプランが想定される。床のほぼ中央付近にSR62の鍛冶炉が確認できたが、小鉄滓の散らばりや比熱した状況は確認できなかった。このため住居跡自体を鍛冶工房としての建物と考えてよいのかは判別できなかった。出土した遺物は細片が多い。**Fig5-2**のふいご羽口片は埋土から2/3が出土し、残りがSR62から出土したがここではSC13の遺物として図示した。**2**の色調は外面赤茶色と一部黒灰色を呈す。復元外径7.6cm、内径3.2cmで残存長10.4cm。胎土には1～3mm程の砂粒を多く含む。内面には焼土が詰まっている。



PL.3 SC10周辺近景



SC10



SC3

Fig.4 SC実測図 (S 1/60)



SC10



SC3

PL.4 S C

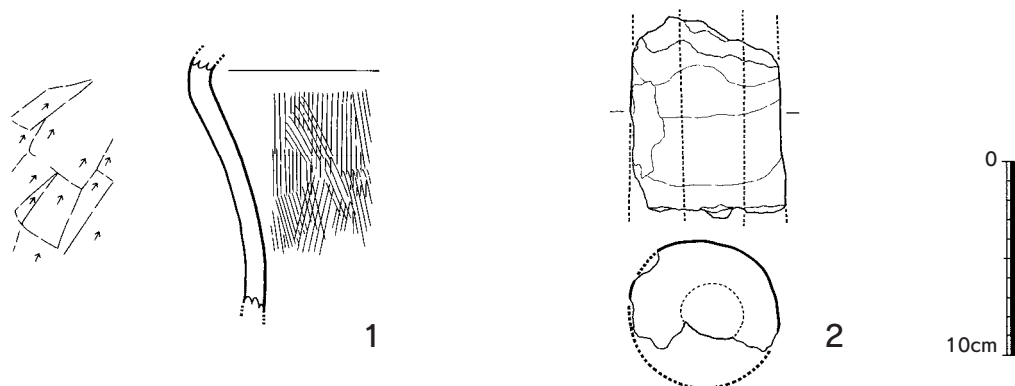
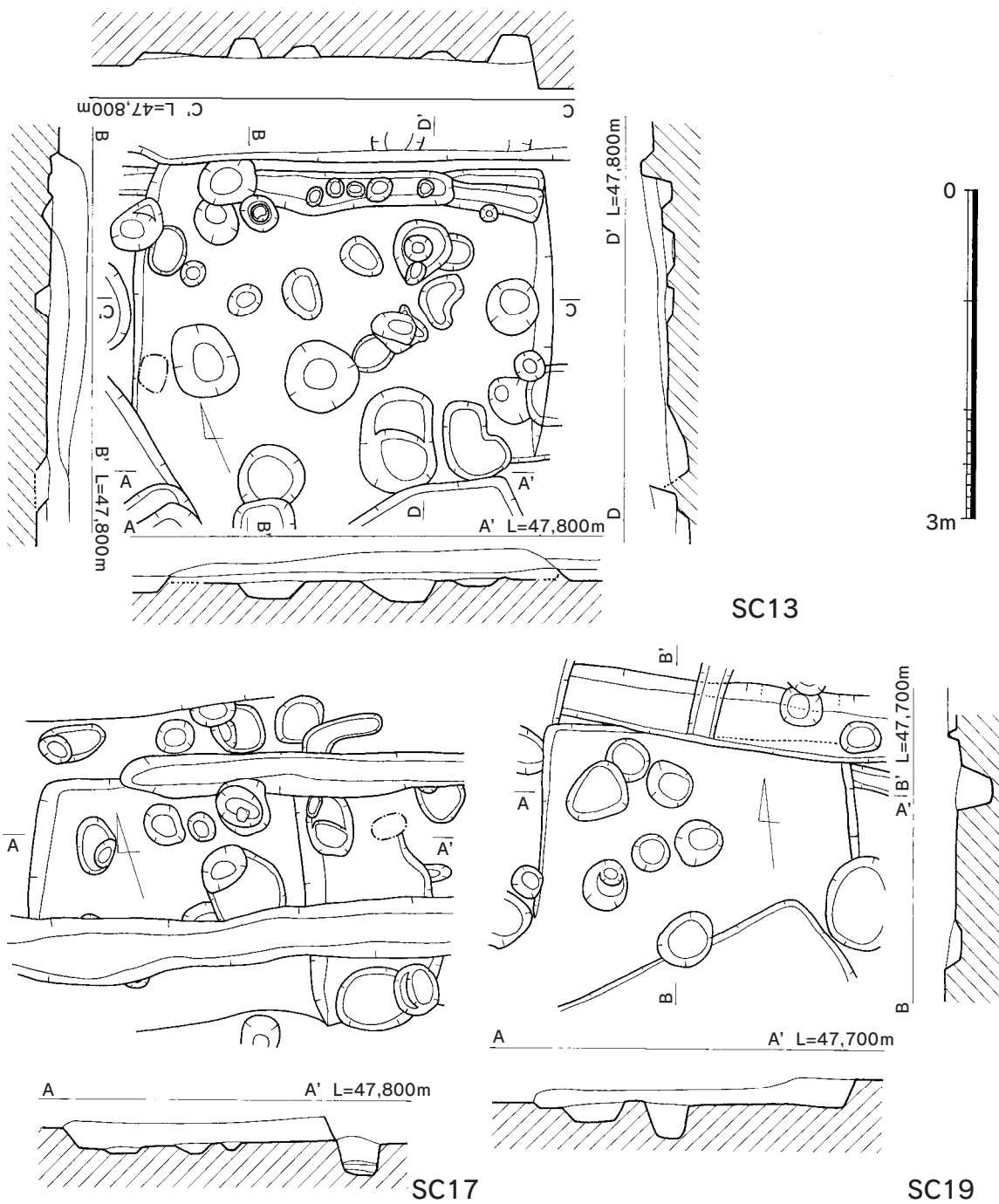


Fig.5 SC実測図及び出土遺物実測図 (S 1/60・1/4)

SC17 SC3の西側に位置する。SD2・7、SC3に切られ、遺存状況はあまり良くない。残りの良い西壁で長さ1.3m深さ14～23cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。床は平坦だが踏みしめによる汚れは見られず、土坑の可能性もある。形状は方形もしくは長方形を呈すと考えられる。遺物は**Fig.6-3**だけが図示できた。復元口径11.8cm、器高4cm、復元底径7cmの須恵器坏aで、ゆがみと焼けむらが見られる。色調は内外ともに灰色N4/を呈し、胎土には僅かに白色粒を含む。外底部はヘラ削り、外体部はヨコナデ、内面はナデで調整されている。大宰府編年IA期のものと思われる。

SC19 調査区のほぼ中央部SC13の西側に位置。SC13・23に切られ、SC24、ST49を切る。北壁をカクランの溝により切られ、北コーナーと南壁の一部だけ検出できた。西壁の残存長1.3m、深さ10cm前後を測り、床面は平坦で汚れが著しい。出土遺物は少なく、**Fig.6-8**のみ図示できた。大宰府編年IV～V期のもので残存高3.85cmの土師器の坏dである。色調は内外ともに赤褐色5YR4/6を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は普通だが器表剥離は著しく磨耗している。

SC23 SC19の南側にあってSC13・19を切り、SK30・82・83に切られる。北壁3m、東壁3.2mを測るも深さ10cm前後と遺存状況は良くない。形状は不整な長方形と推測できる。床面は平坦、踏みしめや汚れは殆どなく、土坑とも考えられる。出土遺物は少なく、時期は明確にならない。**Fig.6-4・6・7**だけが図示できた。**4**は大宰府編年IA期、7世紀中頃の須恵器坏蓋片。残存高2cmを測る。胎土には微砂粒が多く含まれるが焼成は良い。内外ともに灰色7.5Y6/1の色調をなす。細片だがロクロ回転右が確認できる。**6**は胴部中央に最大径のある土師器甕の破片。口縁部内面はハケで、外面口縁部はナデ、胴部内面はケズリ、外面胴部はハケにより調整。胎土には角閃石と雲母を少量含んでいる。内面の色調は黄褐色10YR5/6、外面は黒褐色10YR3/1を呈す。外面胴部に所々に煤が付着している。残存高は19.6cmで、口径は復元できなかった。



Fig.5-1



Fig.5-2

7は土師器甕。残存高6.4cm、胴部内面はケズリ後ナデ、外面胴部中央はハケによる仕上げで、頸部付近はハケ目後にナデにより調整されている。外面には煤が付着する。外面の色調はにぶい黄橙色10YR 6/4、一部褐灰色10YR4/1で内面は黄橙色10YR6/4を呈す。**6・7**ともに焼成は良く、ともに7世紀中頃のものと思われる。

P L . 5 出土遺物

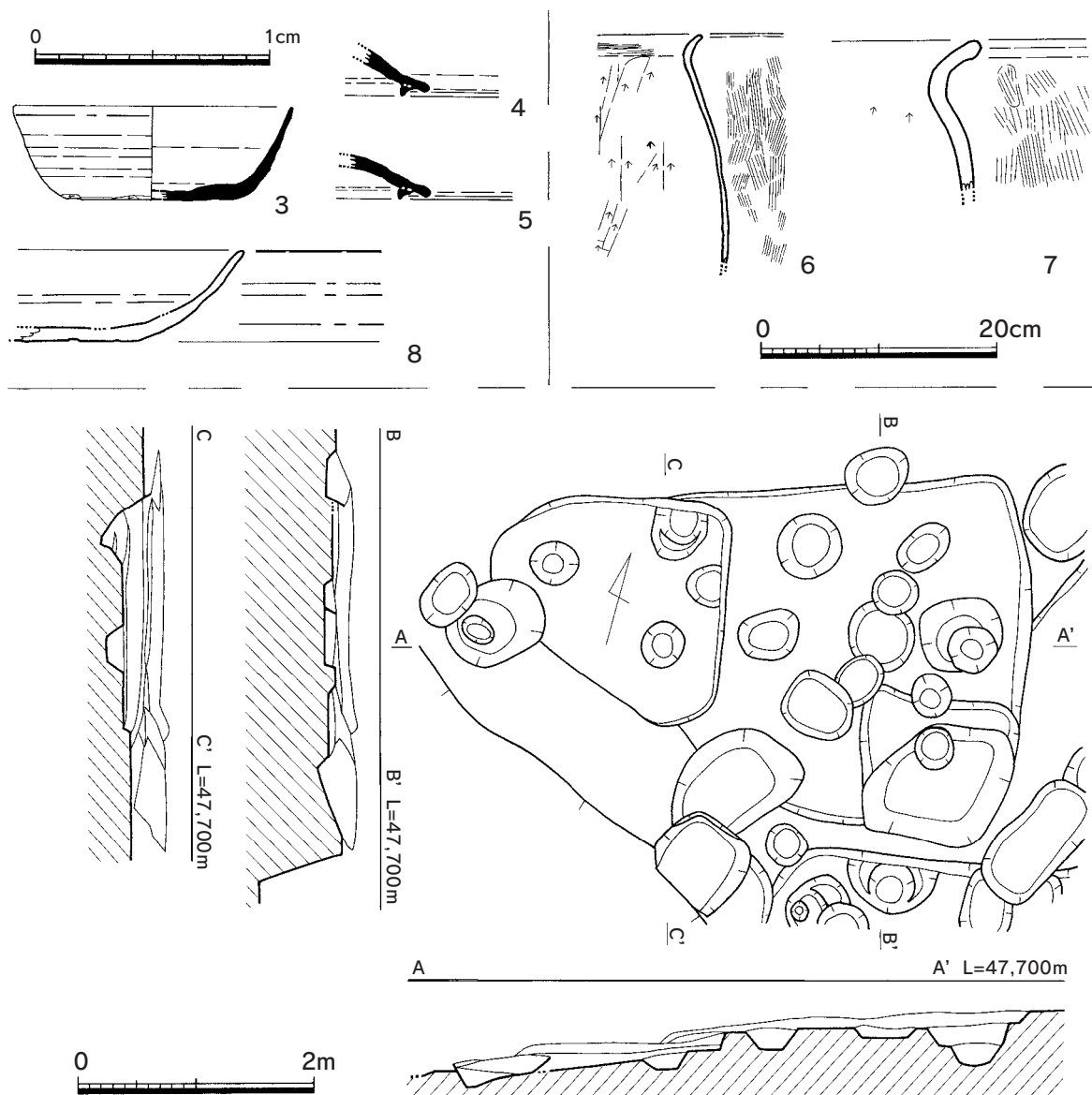
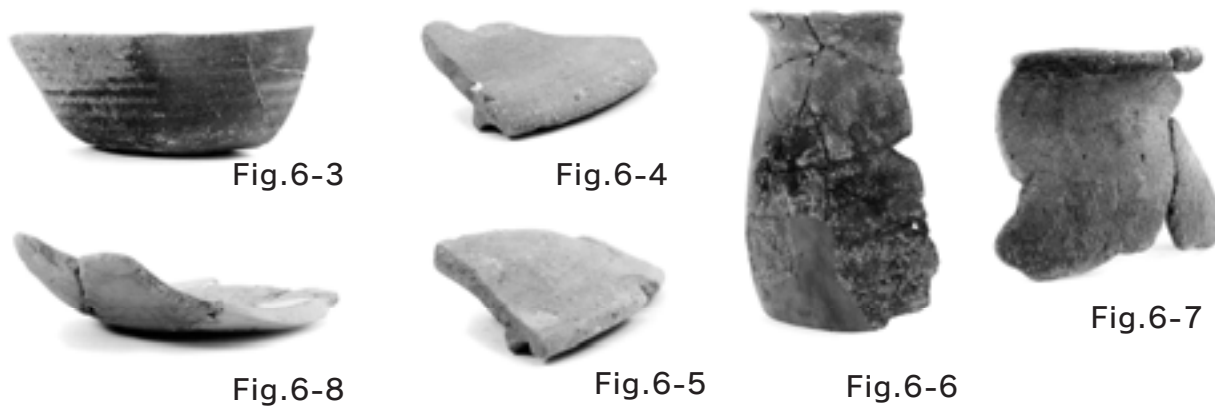


Fig.6 SC23実測図及び出土遺物実測図 (S 1/60・1/3・1/6)



PL.6 出土遺物

SC24 SC19の西側にある。SC25・ST20に切られ、SC26・SD47・48を切る。北壁長4.2m、深さ15cm前後と残りは良くない。西壁長3.8m、深さ10cmを測る。壁は緩やかに斜めに立ち上がり、床面は平坦で踏みしめはあまりなく、比熱をうけた状況もない。また鉄滓の散らばりも見られない。形状はやや寸詰まりの方形かと思われる。西壁はSC25の西壁と重複している。今回別々の遺構として採り扱ったが、SC25を拡張したものか、SC24の可能性も考えられる。住居内の埋土は他の住居跡に比べると焼土や灰などの混じりが多く見られた。出土遺物は摩滅した土器や図示できない細片が多く、この遺構の時期を表しているものではないが図示した。**Fig.8-9**は、須恵器の坏蓋。残存高1.9cm。色調は外面暗灰色N3/、内面灰色N4/を呈す。胎土には1mm大の微砂粒を含むが、焼成は良好で堅緻である。大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期にあたる。**10**、須恵器の完形の小皿。SC24・25の段差境界付近の床面より出土した。口径8cm、器高1.8cm、底径6.1cm。色調は内外ともに灰色5Y5/1を呈す。胎土には白色・黒色の砂粒を含くみ、焼成は良い。大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期のものである。

SC25 一辺が2.7m前後の方形の形状をなす。SK35とST20に切られる。住居内埋土には灰や焼土の混じりが多く他の遺構に比較すると黒い埋土となる。床面は平坦で汚れは顕著、床面の中央付近にSR64がPitを切って造られている。南西コーナー付近にはSR65もあり、周辺部の床面には焼土が散らばる。しかしながら床面は直接比熱されてはいない。またPitも深いものではなく、柱穴としてまとまるものもない。SC25の南側斜面部には鍛冶炉が多く検出されていて、この付近が製鉄関連の中心部かと思われる。出土遺物は摩滅した細片が多い。**Fig.8-13**ふいご羽口破片。復元外径6.6cmの胴部片、内外ともに灰黄褐色10YR5/2、明褐色7.5YR5/3の色調を呈す。



PL.7 SC24・25

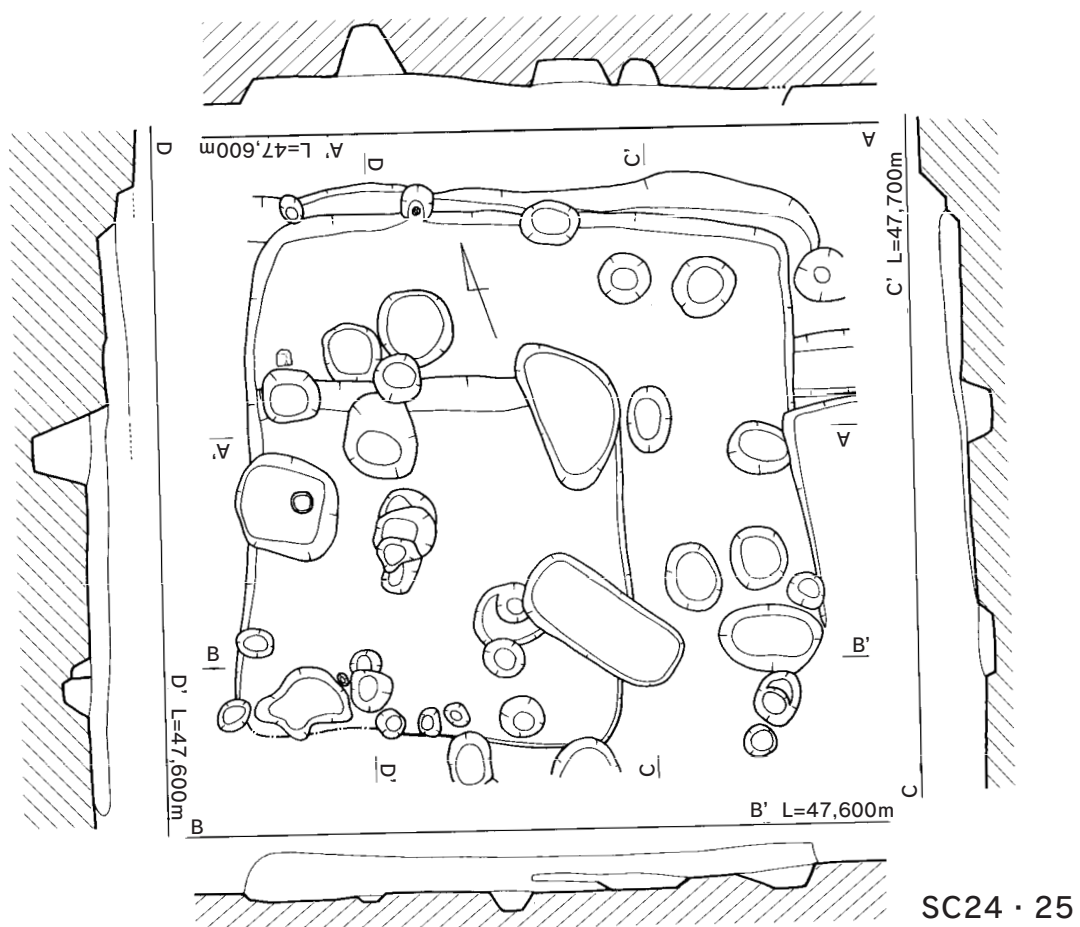
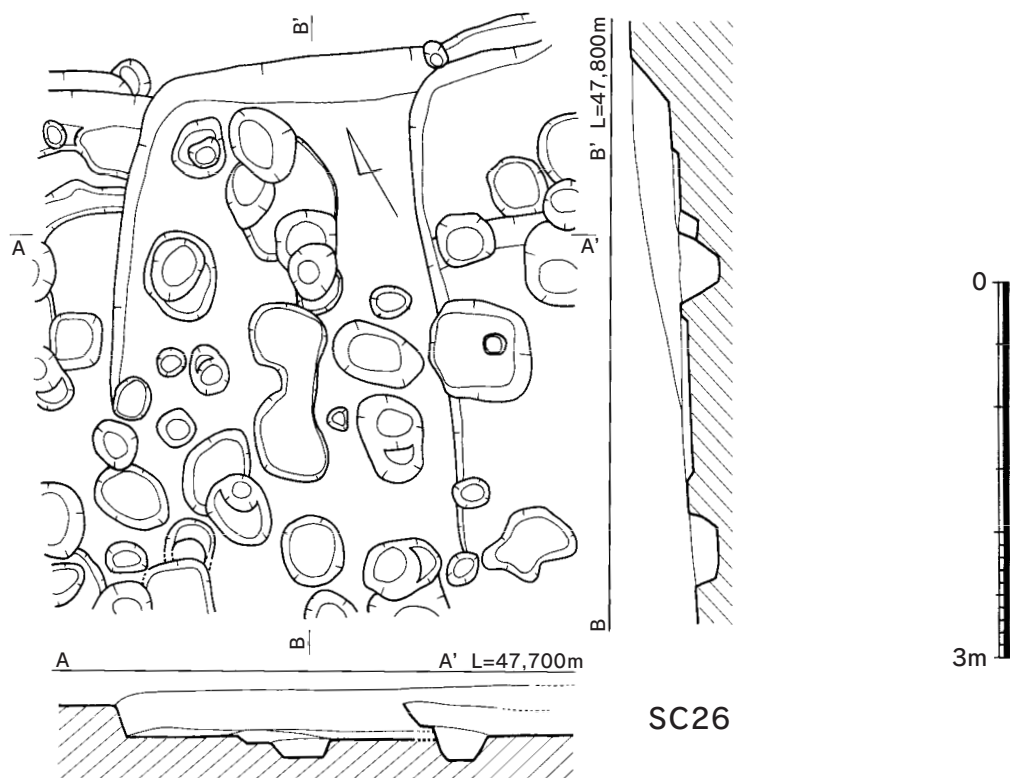


Fig.7 SC実測図(1/60)

SC26 SC24に切られ、北壁2.1mと西側2.6mだけが検出できた。壁の立ち上がりは北・西ともに直に近い。床面は平坦で、汚れが顕著。床面の中央部にSR66があるが、床全体は比熱されていない。出土遺物は、やはり少ない。**Fig.8-11・12**が図示できたが、SC26の時期を示すものとは考え難い。**11**は須恵器高台付坏C。高台が剥離している。内外ともににぶい赤褐色5YR4/4の色調。胎土には1～3mm大の砂粒を多く含んで焼成も悪い。大宰府編年のIV・V期に該当。**12**、大宰府編年IV・V期の土師器大椀C、残存高10cm、内外とも赤褐色2.5YR4/8の色調となる。胎土は精製され焼成も良い。

SC28 SC26の西側にある。SC26にきられているため本来の形状は不明。西壁2.7mを測る。西壁の立ち上がりは緩やかな斜めとなる。住居内の埋土には灰や焼土は混じらない。遺構の重複が多いが、床面はほぼ平坦である。床には踏みしめによる汚れはない。出土遺物は弥生土器の碎片が多いが図示できるものはない。

SC31 調査区の西側で現代のお墓等のカクランが多い所にある。斜面縁辺にあるため北・西壁の一部しか遺存しない。本来の形状は不明。床面は平坦で踏みしめによる汚れが顕著。出土遺物は弥生時代と思われる碎片が多くみられた。

SC69 調査区最北部にあり、現在の墓や遺構との重複が著しく、形状や規模は明確にない。遺存の良いところでは深さ80cm前後を測り、確認できた部分の床面は平坦で、踏みしめ等の汚れはない。

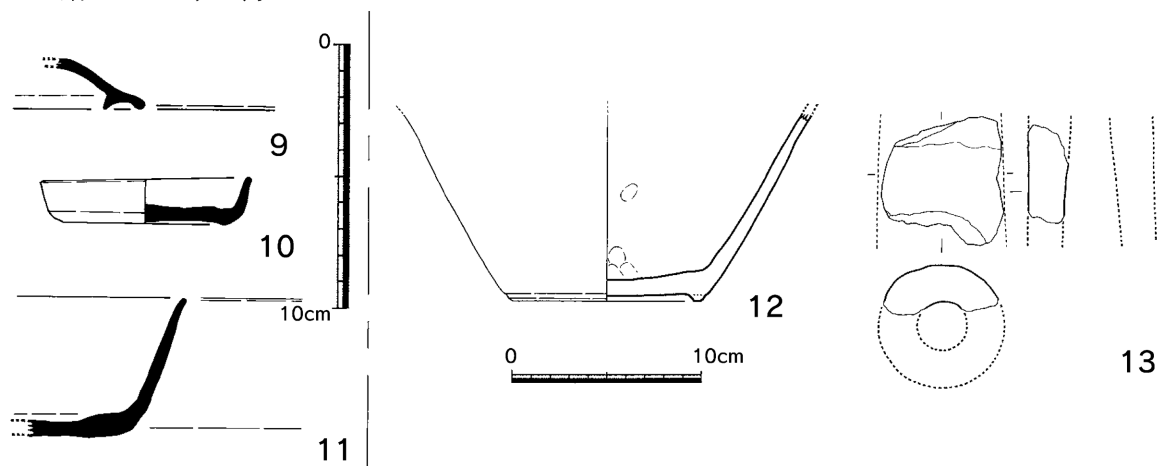
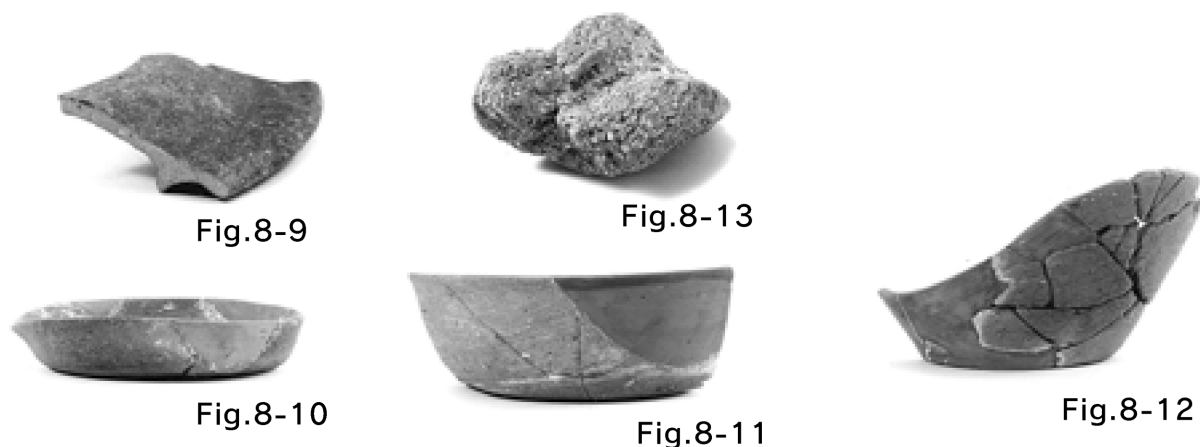


Fig.8 出土遺物実測図 (S1/3 · 1/4)



PL.8 出土遺物

②SD（溝状遺構）(Fig.9・10, PL.9)

現代の排水溝を除いて全体で25条検出できた。等高線に並行して掘られたものが多い。

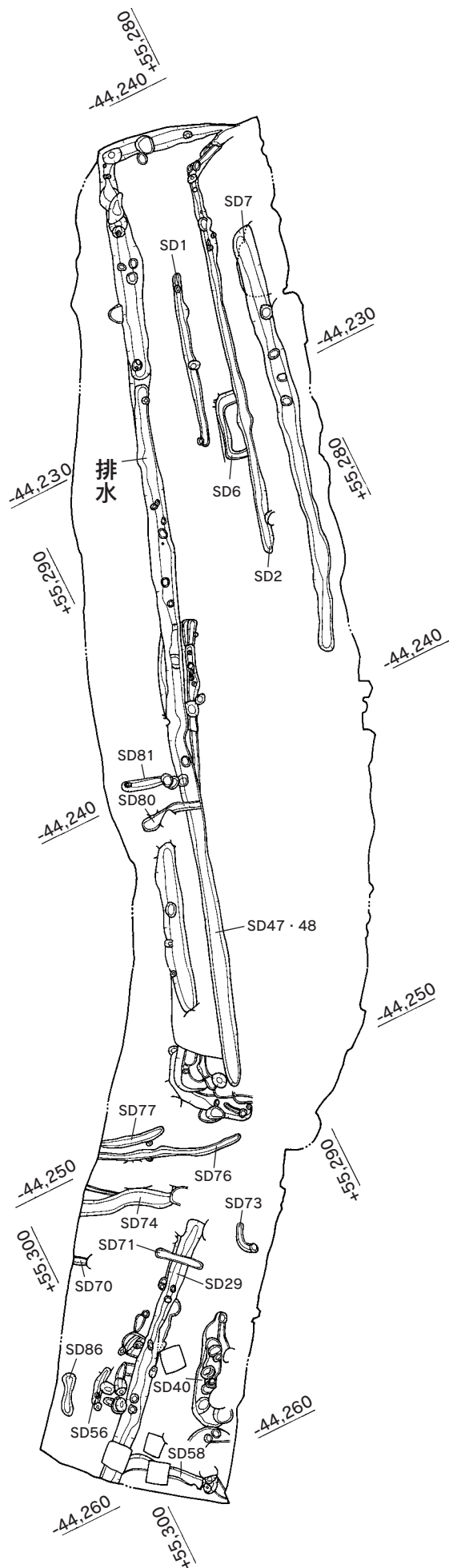
SD1 調査区の南側にある幅30cmの溝で断面は緩やかなU字をなし深さ10cm前後とやや浅い。溝は南北方向に延びて終息する。排水溝と平行し全長5.6mを測る。これも新しい排水溝とも考えられたが剥土の段階では確認できなかったのが遺構として扱った。遺物は土師器・青磁片が出土した。

SD2 SD1の南にあってこれもSD1と平行して掘られている。SC3・17、SD6、SR4(横口付木炭窯)を切る。これもほぼ東西方向に走り、SD1・2と平行する。直線的に12.5m延びて、調査区東端近くで谷部の方へ「く」の字に曲がり終息している。幅40cm前後、深さ20cmの断面浅いU字状を呈す。出土遺物は須恵器・土師器・弥生土器の碎片が出土した。

SD6 SD2に切られる。検出できたのは北側と北から東西側に直角に曲がる南北の両コーナー付近のみ。北側は長さ2m、幅20～30cm、深さ20cmを測り、断面形状U字状をなす。南側を検出できなかったため全体の形状は不明。遺存する部分から一辺2mの方形ないし長方形の墓の周溝であった可能性も考えられる。

SD7 斜面の縁近くにあり、SD2にはほぼ平行しSK8を切る。東西方向14mに走り、直線のまま終息する。溝の幅は西側最小幅30cm東側が最大幅70～80cm前後を測る。深さは南側のほうがやや浅く、SD2とは水の流れが異なる、溝の断面は東西ともに緩やかなU字状をなす。東側は窯状遺構の前で終息している。須恵器・土師器・弥生土器片が出土した。

SD29 調査区の西側にあり墓地の方へと続く。検出長8.8m、幅50～70cmを測り、西側が幅広となる。深さは30cm前後で東側がやや深い。出土遺物は少なく細片が多い。Fig.10-14・15だけが図示できた。14器高4.7cmの高



0 10m

Fig.9 SD位置図 (S1/200)

台付坏。胎土には1mm大の砂粒を多く含み、焼成は悪い。色調は内外面ともにぶい赤褐色5YR4/4を呈す。器表は摩滅しているが内外ともにナデによる仕上げ。底部外面にヘラ記号の一部が残るが明確でない。大宰府編年IB期の坏Cである。**15**、土師器鉢の口縁部片。復元口径33cm、残存高3.5cm。摩滅しているが内外ともにケズリによる調整。胎土には1mm大の砂粒を多く含むが焼成は良い。内外ともに明黄褐色10YR6/6の色調を呈している。大宰府編年IV・V期のものである。

SD40 SD29の西側で検出。SC31に切られ、西壁は不明。北壁の立ち上がりは直に近い。検出長4m、幅70cm。出土遺物は碎片の土師器片のみである。

SD47・48 SC24・26の北壁と重複する様に検出した。SC24・26拡張の際の遺構かとも考えたがSC24の東コーナー部で終息している事から別遺構とした。本来の形状・規模については不明。深さは東側30cm、西側40cmとなり、西向きに水の流れがあったと思われる。出土遺物は摩滅した弥生土器片だけである。

SD75・76・77 カクラン溝とSD29の中間で検出。いずれも等高線に直交し、蛇行しながら尾根方へと延びる。**75**の断面形状はV字、**76・77**はU字状をなす。出土遺物はなく時期は不明。形状や尾根に向かうなど排水溝としての機能はなく、SD1・2・7・29とは用途も異なるものと考えられる。



PL.9 SD及び出土遺物

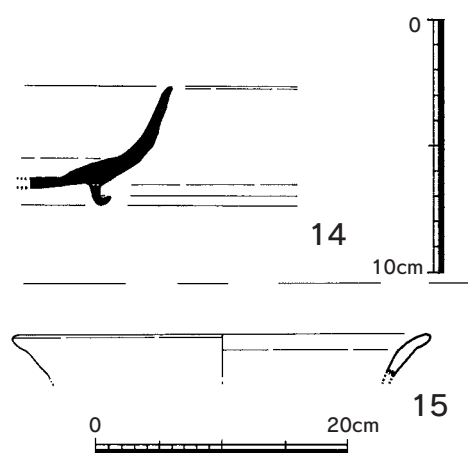


Fig.10 SD出土遺物実測図(S 1/3・1/6)



Fig.10-14



Fig.10-15

③SK (Fig.11・12, PL.10・11)

検出した土坑は24基で、大半が調査区の中央部から南側で検出された。

SK8 調査区東側縁辺で検出。SD7・窯を切る。検出最大幅2.6m、北壁1.9m西1.3m、東1.6mで深さ40cm中心付近の深さ45cm、東側深さ25cmを測る。床面は中心付近が深くなり、平坦でない。床面北側に変化点があるため、遺構の重複かとも思われたが確認はできなかった。斜面部分が遺存していないので形状は不明。出土遺物はFig.12-16が図示できた。16、大宰府編年IA期の坏蓋。北東床面から出土。器高2.5cm、口径13.7cmを測る。焼成は摩滅が著しく、表面だけが還元されてやや軟質である。色調は内外ともに褐色7.5YR4/3を呈す。

SK14 SC3の北西コーナー付近にある。SD2・試掘トレンチにより切られる。西壁1.2m、東壁1m、深さ14~18cmを測る。平面プランは不明、床面は平坦となる。須恵器・土師器片が出土したが、図示できるものはない。

SK16 SC23の南に近接。SK60に切られ、南壁の一部を失う。北壁1.8mと東・西壁の一部のみ遺存。壁は北・東・西ともに直線だが、東南コーナー部は丸みをもつ。北西側コーナーもPitに切られているが丸みがあり、本来の形状は隅丸長方形と思われる。北壁側深さ32cm、西壁側14cmを測り、床面は平坦となる。弥生土器の細片だけが出土した。

SK18 SD7に切られ、SK21を切る。長軸1.4m、東壁幅52cm、西壁幅80cmの不整な隅丸長方形を呈す。壁面は四方とも緩やかに斜めに立ち上がる。深さ26cm、床面は中心部がやや深く、西側に深さ26cmのPitをもつ。須恵器・土師器片が出土した。

SK21 SK18の東側の斜面縁辺にある。現存長軸1.85m、短軸90cmを測り、東壁側は深さ50cm、西壁側30cmとなる。壁の立ち上がりはやや直に近い。本来の形状は隅丸方形か隅丸長方形が推定される。床面はやや中心部が深くなり、西側に径15cmのPitをもつ。出土した遺物はFig.12-17・18・19。17は弥生中期の壺口縁片。復元口径12.5cm、残存高4.7cm。内外面ともに磨耗しているため調整は不明。胎土には砂粒を多く含んでいるが焼成は良い。色調は内外とも黒褐色10YR2/2である。18は著しく摩滅した弥生中期前半の甕の底部で、残存高5cm、底径6.3cmを測る。内外とも赤褐色5YR4/6の色調を呈し、胎土には2~5mm大の砂粒を多量に含み、焼成はややあまい。19は凝灰岩製の磨石。残存長8.2cm、幅4.9cm、厚み5.1cmを測る。本来の半分程を欠損している。両面ともによく使用されていて平坦で滑らかになっている。表面は火を受けた跡が残り、やや脆くなっている。

SK22 SC10に切られる。長軸1.2m、短軸1mの寸づまりな不整隅丸方形の形状を呈す。壁の深さ20~25cm、壁の立ち上がりはやや直線的になる。床面は平坦で弥生土器・土師器片が出土した。

SK33 SC23を切る。長軸1.9m、東側2m、西側90cmの不整形な形状を呈す。深さも7~17cmで遺存は良いとは言えない。壁の立ち上がりは緩やかに斜めとなる。床面は平坦。埋土上層には灰や炭や焼土が混じるが遺構自体が比熱した様子は伺えない。遺物は須恵器・弥生土器片・鉄滓が出土したが図示はできない。

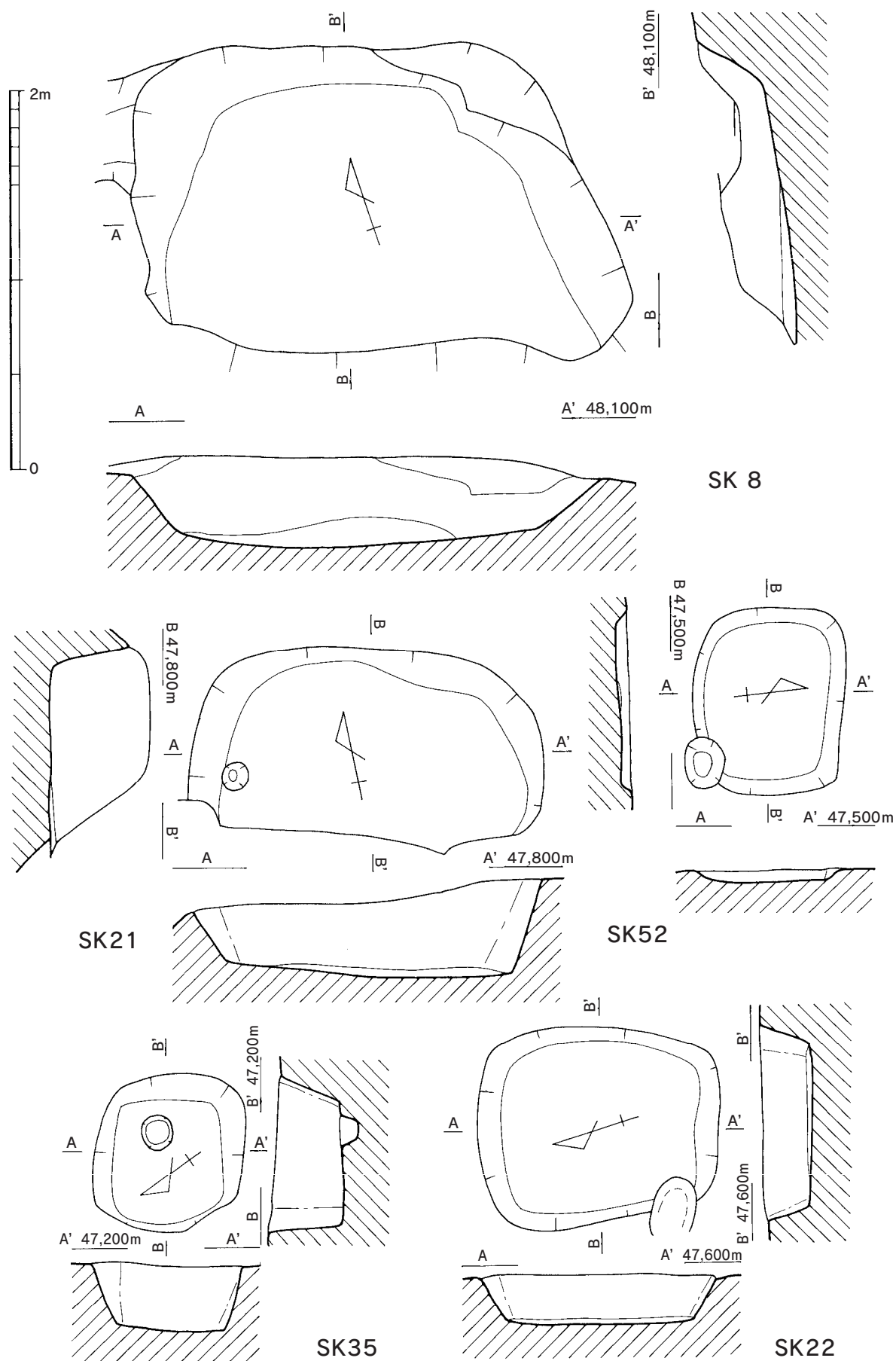


Fig.11 SK実測図 (S 1/30)

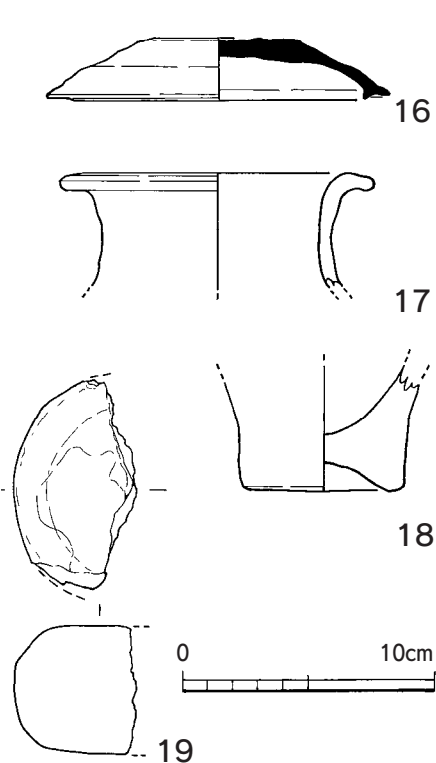
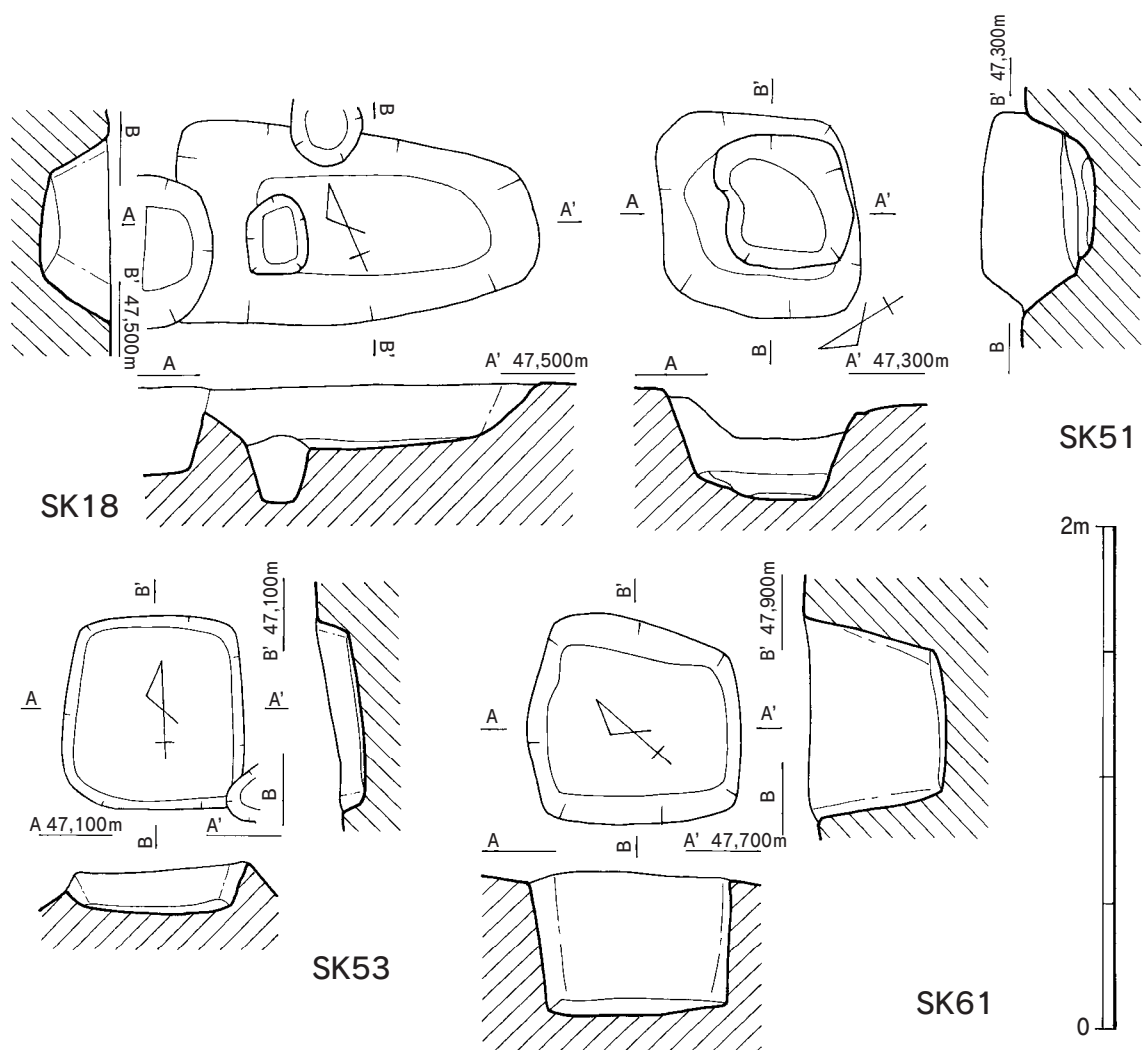


SK21 · 2



SK35

PL.10 SK



SK35 SC25を切る。一辺が70cmの隅丸方形の形状をなすが、やや寸づまりで不整。壁の立ち上がりは直に近い。床面東側に径20cmのPitがあり、深さ35~40cmを測る。床面はほぼ平坦。遺物は摩滅した弥生土器片・須恵器片が出土した。

SK42 SD29に切られる。残存長軸85cm、短軸50cm、深さ14cmを測る。形状は不整な円形と思われる。床面は平坦。遺物は摩滅した弥生土器片が出土した。

SK43 調査区西側にある。SK84・SD29に切られる。重複が多いため本来の形状は不明。深さ7cm、検出長軸85cm、短軸50cmで床面は平坦となる。壁の立ち上がりは直に近い。遺物は摩滅した弥生土器片が多い。

SK44 調査区最西端にあり、SD29・現代の墓に切られ全容は不明。調査区外へと続いて東壁の一

Fig.12 SK実測図及び出土遺物実測図(S1/30・1/3)

部しか検出できなかった。検出できた床面は平坦。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・磁器片が出土した。

SK45 SK44の北側に位置し、SD29・SK84に切られる。北壁の一部のみ検出。詳細は不明。摩滅した弥生土器片が出土した。

SK51 SC26の北西コーナー近くにある。一辺が79cm前後の不整な隅丸方形を呈す。床面は緩やかな曲線を描き中心部が深い。弥生土器・土師器片が出土した。

SK52 SC10のほぼ中央部にあり、SD7と近接する。長軸1m、短軸78cmの隅丸長方形を呈す。深さ5～8cmと残りは悪い。四方の壁は緩やかに斜めに立ち上がる。床面は平坦で出土遺物はない。

SK53 SC26の南側にあつて、ST38を切る。一辺が70～77cmのやや不整な隅丸方形の形状をなす。深さ15cm前後と遺存は良くない。遺物は弥生土器片・鉄滓が出土。

SK54 SK61に切られる。SD74・76の間に位置する。床面は平坦で、南壁近くに径20cmのPitをもつ。長軸95cm、短軸89cmを測り、やや寸づまりな方形の形状をなす。

SK60 SR68に切られる。SK16の東側にある。斜面縁辺にあつて、非常に浅い。形状は不整な楕円形をなす。

SK72 SD71の南側に位置し、隅丸方形の形状。Pitと重複するが床面は平坦。一辺が1.17m、深さは17～20cmを測る。出土遺物はなく、時期は不明。

SK78 SC28の西側にあつて、SD77に切られる。不整な徳利状の長い形状をなす。南側ほど狭く丸みをもつ。Pitと切りあっている可能性もある。埋土上層には焼土が混じり、5～11cmの深さとやや浅い。等高線にほぼ直角にあり、一見すると溝状遺構とも誤認される。ただ壁の立ち上がりは直に近



Fig.12-16



Fig.12-17



Fig.12-19



Fig.12-18

PL.11 出土遺物

く、床面は平坦なため土坑とした。

SK82 SC23と重複し、SK83に切られる。形状は不整形で、一辺1.35m、5～11cmとやや浅く遺存状況は悪い。床の殆どが切られているが平坦に近い床面となる。

SK83 SK82を切る。不整な楕円形をなし、28～36cmと深く、床面は平坦となる。

SK84 調査区の西端にある。SK45・85を切り、現代の墓・SD29に切られ未調査区へと続く。形状は不明。検出できた床面は平坦となる。

④ST(Fig.13～16, PL.12～16)

ST5 調査区東端の斜面縁辺にあって横口付木炭窯に切られ、主軸をN-24°-Wにとる。検出長軸1.54m、幅0.5m、深さ25cm前後を測る。北壁壁の立ち上がりは緩やかだが、東西の壁は直に近い。形状は丸みを持つ、不整な半円形をなす。床面は平坦となる。土坑かとも考えたが、ST37・49と同様に考え墓とした。**Fig.14-21**の蓋が西壁近くの床面15cmで裏返った状態で出土した。**21**は須恵器の蓋。口径15.35cm、つまみ径2.6cm、器高2.6cmを測る。つまみはボタン状をなし、色調は内外ともに灰オリーブ5Y6/となる。焼成は良好。大宰府編年Ⅱ～Ⅲ期のものである。

ST9 SC13の南、SC10を切る。長軸1.15m幅0.5mのやや寸詰まりの隅丸長方形の形状をなし、主軸方向をN-25°-Wにとる。四方の壁の立ち上がりは緩やかで、床面は中心付近がやや深い。

ST12 ST49の北東側に位置し、排水溝に切られる。主軸はN-25°-Eで長軸1.8m、幅0.6～0.7mとやや北側が広い。壁は四方とも直に近く立ち上がる。床面は、ほぼ平坦。床の中央部直上から**Fig.14-20**が出土した。**20**、土師器の坏a。内外ともに摩滅が著しく調整は不明。色調は内外とも灰白色10YR8/2を呈す。胎土には砂粒を少量含んで焼成は普通。大宰府編年Ⅶ期のものである。

ST15 SC11・13を切る。主軸をN-38°-Wにとる。長軸1.8m、幅0.6mの隅丸長方形を呈す。床面は平坦で壁の立ち上がりは直に近い。出土遺物はなく時期は不明。

ST20 SC25を切る。主軸をN-52°-Wにとる。長軸1.4m、幅0.45～0.6mと北西側が広く、やや寸づまりの隅丸長方形の形状をなす。深さは5～18cmとやや遺存は悪い。床は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。遺物はなく時

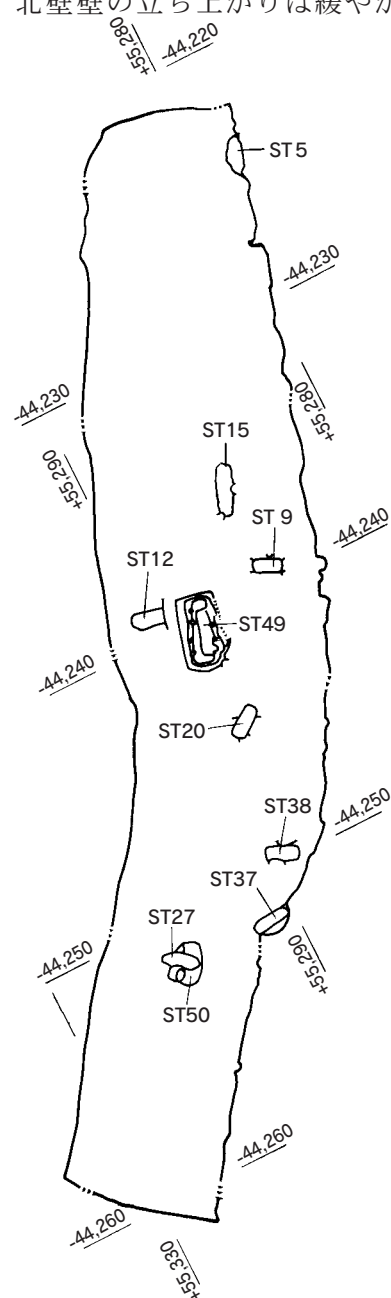


Fig.13 ST分布図 (1/300)

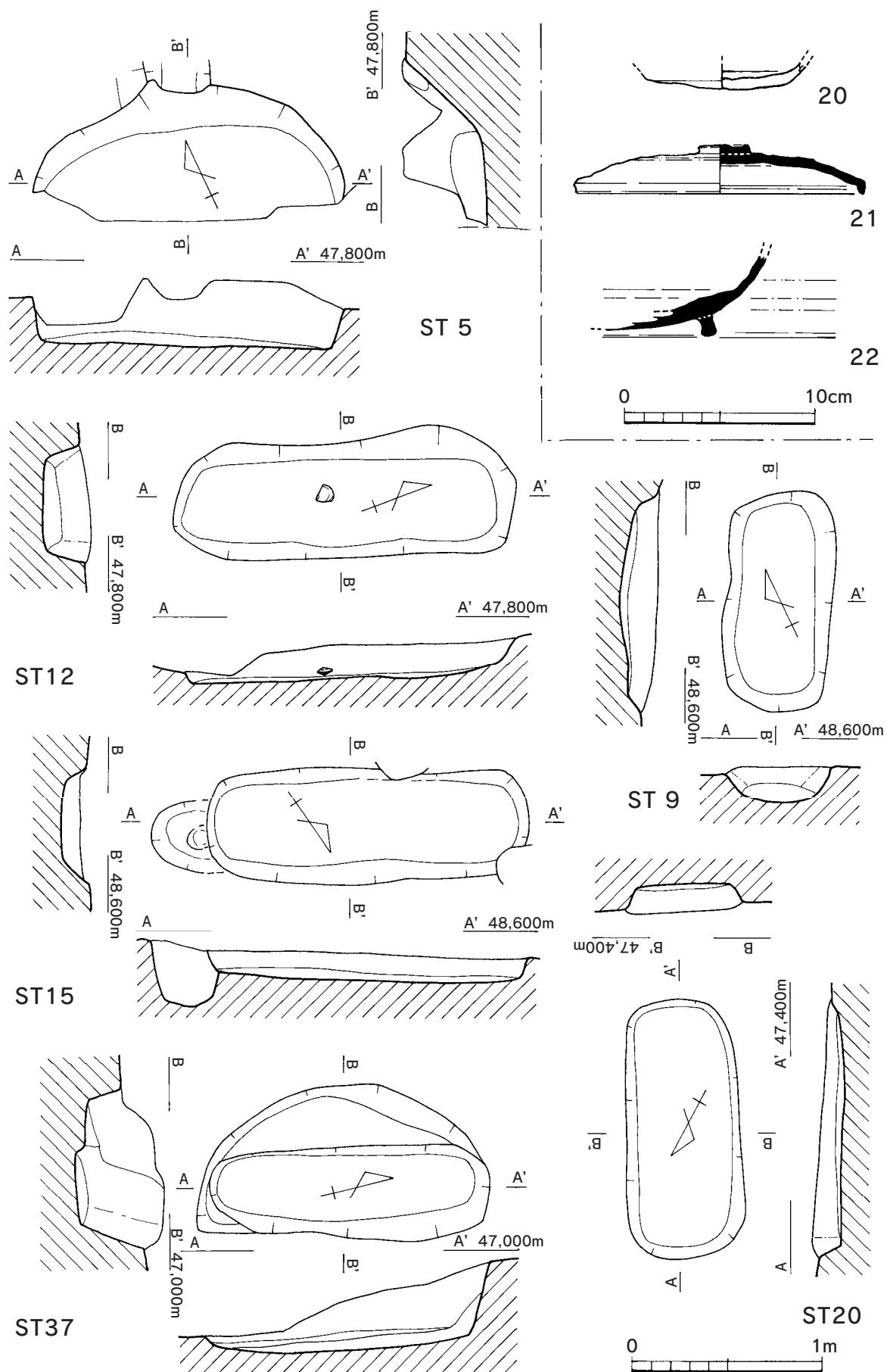
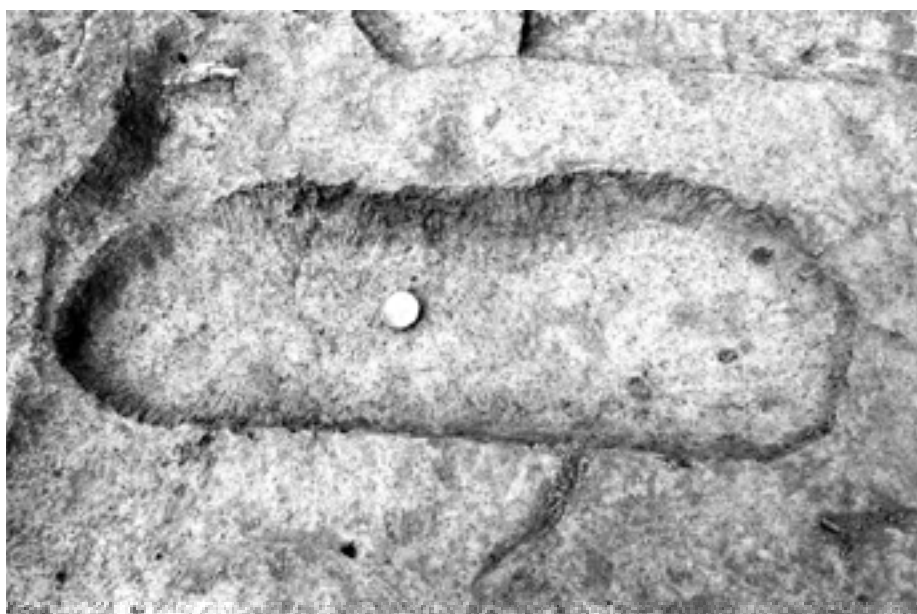


Fig.14 ST実測図及び出土遺物実測図 (S 1/30・1/3)



ST12



ST9



ST20

PL.12 S T

PL.13 出土遺物



Fig14-20



Fig14-21



Fig14-22

期は明確でない。

ST27 ST50を切る。主軸はN-58°-E。長軸1.35m、幅0.35～0.5m、深さ0.3mを測る。やや南側が広く、形状は短軸の壁が極端に丸みを持つ長方形を呈す。

ST37 ST27の南側、斜面縁辺で検出。主軸方向をN-12°-Wにとり、高低差のさほどない二段掘りとなる。上段の形状は不整な半円形、下段は長軸1.5m、幅0.4～0.5mの隅丸長方形をなす。北側がやや広い。壁の立ち上がりは直に近い。

ST38 ST37の東側で検出。SK53に切られる。埋土上層には灰混じりの焼土が堆積している。長軸1.3m、幅0.5～0.6mで北東側がやや広くなる。形状はやや寸づまりの隅丸長方形で主軸をN-61°-Eにとる。壁はやや直に立ち上がる。床面はやや凹凸があるが、ほぼ平坦となる。出土遺物はなく時期は不明。

ST49 Fig.13で示される様に調査区のほぼ中央部で検出された。SC19に切られる。他の墓と比較しても規模は大きく、他の土坑墓や木棺墓とは違いを見せる。Fig.16に示す様に主軸をN-20°-Eにとる。墓坑の形状は三段掘り込みで、上段は長軸2.7m、短軸1.44m前後深さ12～20cmを測る。西南のコーナー付近がPitに切られているが隅丸長方形の形状をなす。床面は二段目の掘り込みが南側に片寄るため10～28cmの幅のテラスを形成している。テラスの床面は平坦な部分と緩やかに二段目の掘り方へと続く個所がある。またテラスとほぼ同一の高さ付近（僅かな沈み込みはあるが）に樹木の残骸を検出。樹木は同レベルで水平に横たわる様に検出された。二段目の掘り方は長軸1.65m、短軸0.81～0.9m、テラスからの深さ42～58cmを測り、若干西南側が広いが隅丸長方形の形状を呈す。この掘り方の長軸中央付近に沿って、南北それぞれ4本の杭(以下軽易な柱)の跡が検出できた。柱の径は20cm前後の円や楕円形を示すが、ほぼ一定の大きさと考えられる。これらは南北で対になっている。この軽易な柱の長軸は、1.65m、短軸0.72～0.9mを測る。柱跡の深さは、三段目の掘り込みまでに到達するものやそれより若干浅いものがある。

三段目の掘り方(棺埋置位置)は、南壁に片寄っているが、俯瞰すると軽易な柱とほぼ同じ位置に掘られた事を示している。上場長軸1.85m、上場短軸0.39m前後、深さ7～10cm

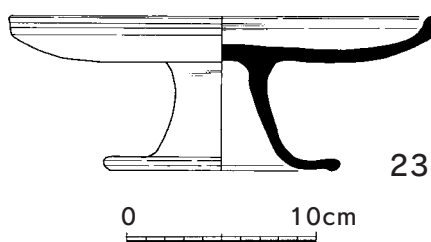


Fig.15 ST出土遺物実測図 (1/4)



Fig.15-23

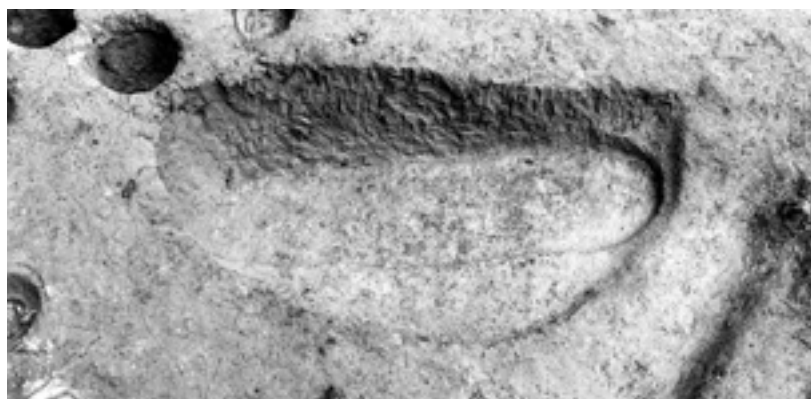
PL.14 出土遺物



ST15



ST27



ST37



ST38

PL.15 ST

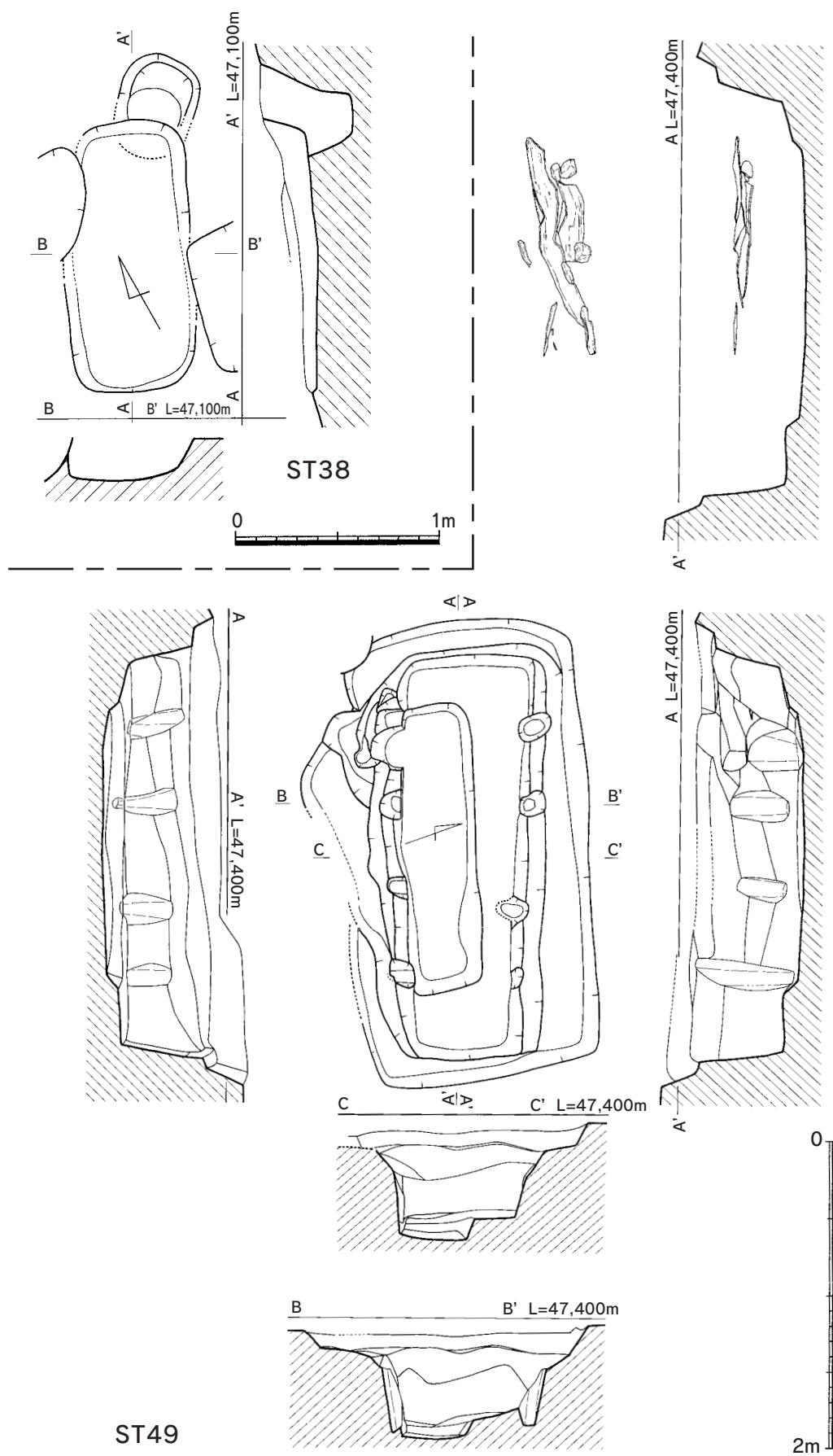


Fig.16 ST38・49実測図 (S 1/30・1/40)



PL.16 ST49

となる。この深さから想定できるのは、二段目の上場ラインの高さより埋葬棺が突出しないように三段目を掘り込んで高さを調節したものと考えられる。また下場のラインは、不整な掘り方で西側35cm、東側30cmと西側が僅かに広い。これが棺の埋置位置ならば、頭位を西側に向けて埋葬されたと考えられる。

詳細が前後したが棺内の埋土状況は、上段掘り方から三段目の底面まで殆ど変化が認められず、一気に埋め戻された様子の堆積状況が確認できた。埋葬棺は木棺であると思われるが、木棺痕跡も埋土の状況からは確認できなかった。

遺物は東側テラスのレベルより下、落下した状況で埋土中より高坏 (Fig.15-23, PL.14) が1点出土した。**23**の高坏は須恵器で受部復元口径22.4cm、裾部径12.4cm、器高8.1cmを測る。胎土には砂粒の混入は少なく、焼成は良好。色調は明赤褐色5YR5/6を内外面ともに呈す。調整は摩滅して不明瞭。時期は8世紀前半から中頃で大宰府編年Ⅱ～Ⅲ期の大高坏aにあたる。

ST50 SD29の東側で検出、ST27に切られる。形状はST37に近く、墓坑は二段掘りで片側は浅いテラスになる。埋土は上層から下層まで灰や炭混じりの土が堆積していたため火葬墓かとも考えられたが、四方の壁や底面には被熱した状況は確認できなかった。埋土中から棺材に使用したと思われる釘らしい鉄製品 (図示できなかった) が出土した事から木棺墓とした。主軸はN-60°-Wをとり、長軸1.56～1.6m、短軸0.65～0.7m、深さ0.3m前後を測る。やや不整な長方形で、上段はST27と重複しているが不整な半円の形状が考えられる。

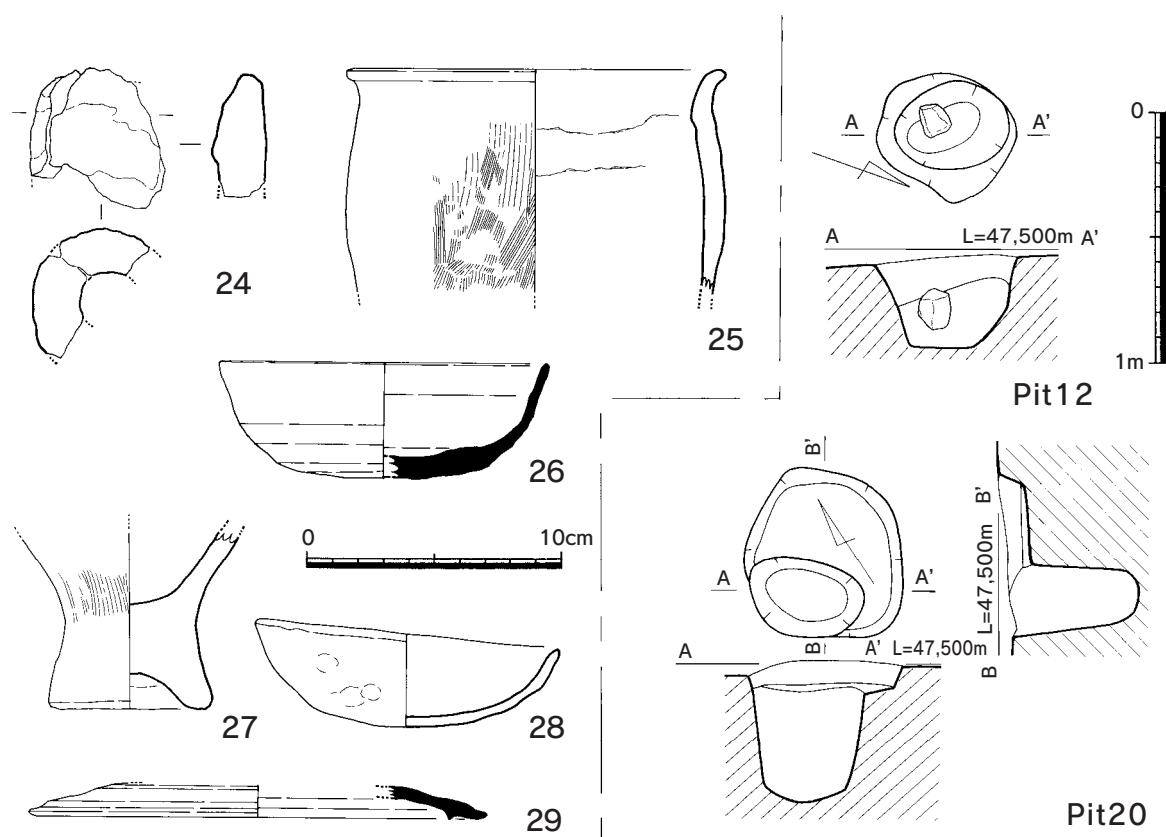


Fig.17 Pit実測図及び出土遺物実測図 (S 1/30・1/3)

⑤Pit (Fig.17,PL.17)

Pitは総数208個検出した。全体的に建物跡としてまとまるPitはない。ただ図示したPit12・20は検出したほかのPitに比べて、しっかりした形状で深さもある。Pit12の埋土の中層には、12×18cmの直方体の石が出土。これも検出した他のどのPitにも見受けられなかった。調査区全域のPit内出土の遺物は図示できない碎片が多いが極力時期の分かるものや特殊な遺物に関しては図示した。

24はPit16の埋土から出土。ふいご羽口の先端部で復元外径6cm、復元内径2.3cm残存長5.3cmを測る。色調は内外ともに橙色5YR6/6、先端部が黒褐色5YR3/1となる。**25**はPit17から出土した土師器の甕片で、復元口径14.9cm、残存高8.9cmを測る。胎土には赤色粒を多く含み、焼成はややあまい。調整は内面から外面口縁部までヨコナデ、外面胴部はハケ目が施されている。7世紀の小甕aである。Pit48より出土した須恵器の坏である**26**は復元口径13cm、器高4.6cm。内外ともに灰色N4/の色調をなす。胎土には僅かな白色砂粒を含み、焼成は良い。底部はヘラ切りのまま、胴部との境目付近は手持ちによるヘラケズリの調整がある。大宰府編年IA期の坏aにあたる。**27**は残存高7cm、底径6.4cmの弥生中期初頭の甕底部。内外面ともに著しく磨耗。胎土には砂粒を多く含んで焼成はややあまい。内面黒褐色5YR2/1、外面赤褐色5YR4/6の色調を呈す。Pit71より出土した。**28**の坏は、土師器でPit4より出土。口径12cm、器高4.2cmで胎土には少量の砂粒を含むが焼成は良い。色調は内外ともに赤褐色2.5YR3/6、内外面はナデにより調整。7世紀の所産。

Pit27から出土した**29**は須恵器坏蓋で、復元口径18cm。大宰府編年IA期にあたる。



PL.17 出土遺物

⑥ 横口付木炭窯（Fig.18～20）

調査区東端部の斜面縁辺で検出。SD2・7とSK8・ST5に切られる。旧地形はFig.2から遺跡の所在する斜面は比較的緩やかな地形を示している。この緩やかな斜面のほぼ中位の高さ、やや谷頭に近い標高47.8～47.2m上に構築されている。

内部層序

I～I'の層序から窯は、最初一気に天井部が崩壊し次に南壁（横口側）が崩れたことを示している。壁や天井部分と考えられる層には花崗岩バイラン土が被熱して、黄褐色に変化したもの8・9・10と考えられる。内部には底面に5～8cm程度の炭の堆積があるが、底面には粘土や焼け固まった焼土などの層の堆積はほとんど見受けられない。このことから、この窯は短期間だけ使用されたと考えられる。

構造

窯体の主軸は、N-88°-Eにとり、標高47.8～47.2mの等高線に平行して構築されている。窯体の天井部と窯壁の一部は崩壊しているが層序から窯体は地山を刳り貫いて構築されたものと考えられる。北壁は直線にまた斜面側の南壁には壁に沿って長楕円形プランの横口燃焼孔が2個設けられる。横口燃焼孔は2個と少なく、周辺部（池田遺跡・塔原遺跡）で検出された木炭窯より非常に小型である。また小型の横口付木炭窯の調査事例として福島県相馬市山田A遺跡のものがあげられるが、峰畑遺跡5で検出した窯体は山田A遺跡の窯体より横口も1個少なく、窯体の長さも短く小型である。窯壁や横口燃焼孔には、粘土による成形はなく、地山（花崗岩バイラン土）が被熱し、熱変化し硬化して3～5cmの厚みをもつ。また還元化した地山は5～10cmの厚みに地山が熱変化している。硬化した壁にもセメント状までの硬化は見られない。窯壁には補修した痕跡も見当たらないことから比較的短期間にのみ使用されたものと考えられる。

横口燃焼孔の底面は若干船底状をなす。

煙道部の構造は上部が失われているため詳細は不明。焼成部の床面より傾斜角20度で緩やかに立ち上がる。

煙道部～焚口部までの現存長4.1m、窯床面最大幅52cm、最小幅37cmを測る、ほぼ水平な床面である。床面は煙道の地形変換点から傾斜角度は12.5度を測り、焼成部2.67mの長さとなる。さらに2.67m付近を床面の地形変換点として直線で90cmの床が続き地形変換点となって緩く「く」の字状に曲がり南側斜面へと曲線で続く。この「く」字状の床面から煙道部90cmの所からが焚口となる。焚口窯壁の被熱度は焼成部とさほど変わりなく、硬化壁は厚さ10cm前後を測る。焚口のプランは一部SK8に切られるため明確な平面プランは不明だが、南側上部平面プランは焚口付近より曲線で北側に40cm逆L状に、南側は直線で75cm開き、あたかも登り窯の形状をなす。不整な長方形の形状が想定される。開口した窯壁部分の熱変化は少ない。この開口部の床面、現存長1.3m、幅1.1～1.3mの部分には、厚さ10cm前後の熱変化が確認できる。しかしこの熱変化は硬化までには至っていない。また硬化面下には船底状の落ち込みが掘られ、炭が厚さ10cmほど堆積していた。やはり登り窯の前庭部に近い構造をもっている。多くの調査事例からは横口の前面には前庭部が造られていたと想定されているが、峰畑遺跡5で検出された横口の前面には（無論ST5により切られていて全容は不明であるが）

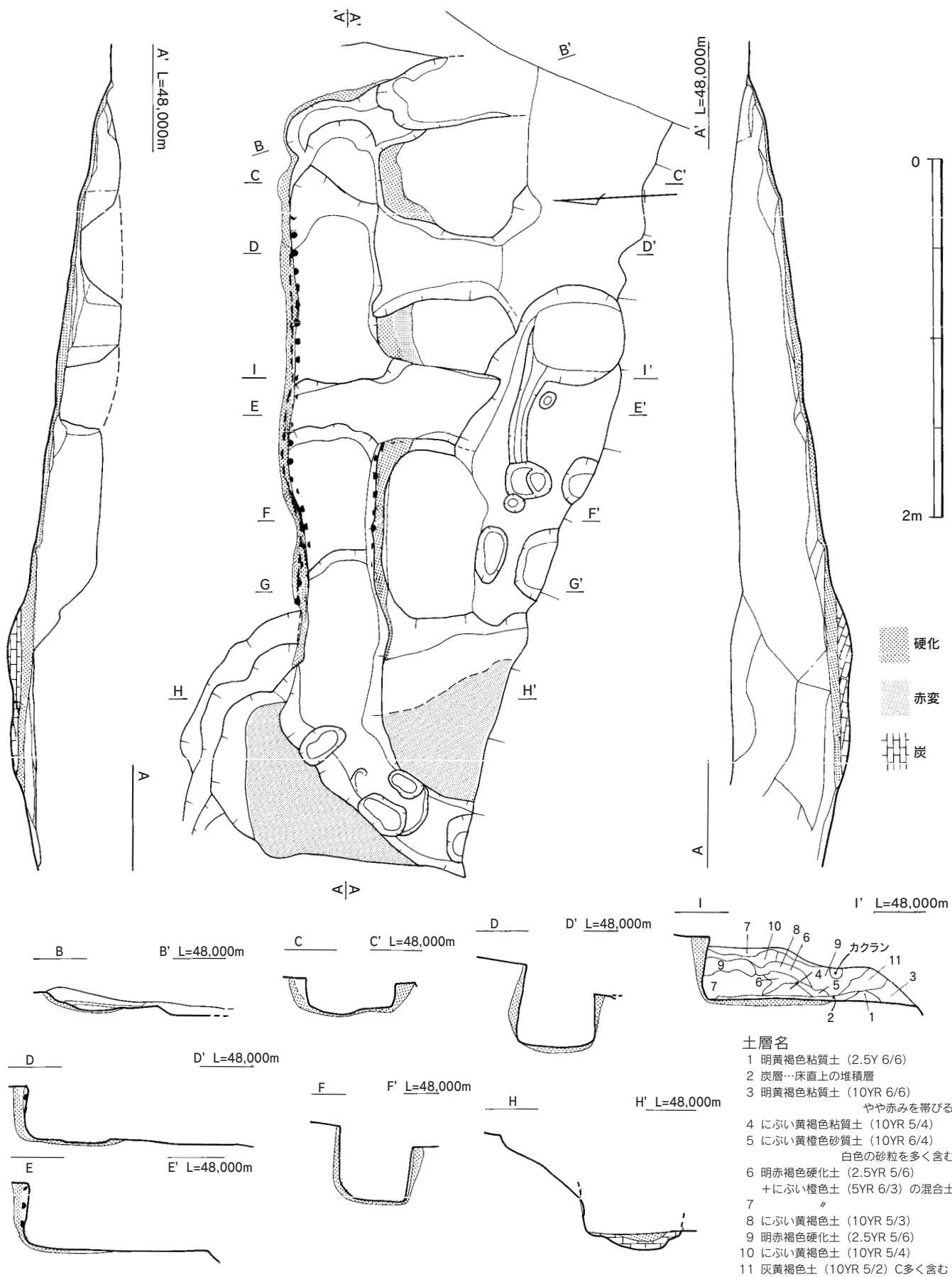


Fig.18 窯実測図及び土層図(S1/30)

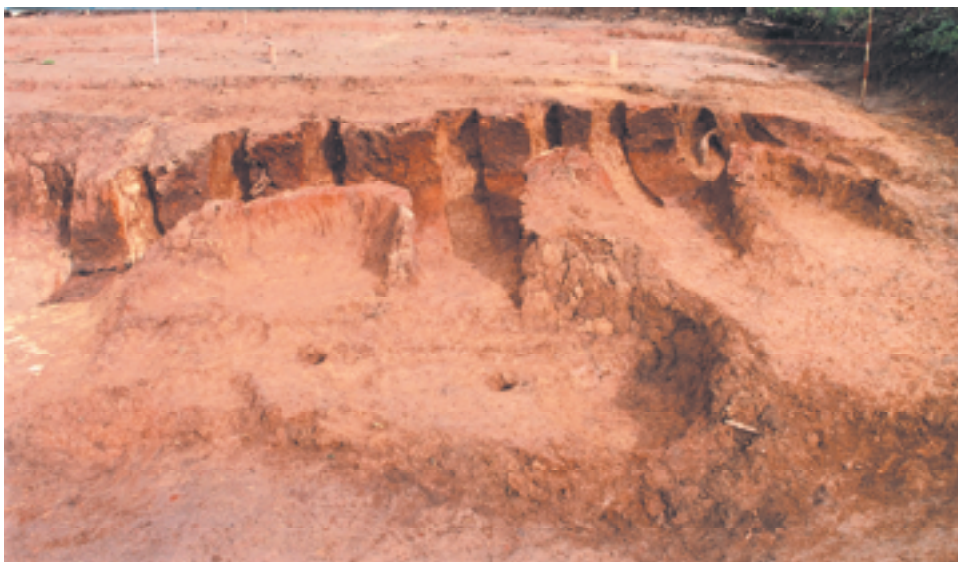
ST 5 の東側に残る幅60cm前後の平坦面がある。調査事例を考慮すると、この平坦面が前庭部の名残りかとも考えられる。しかしこの平坦面上の堆積土には木炭や灰・焼土などの層の堆積は、確認されなかった。斜面部のために炭・灰などの流出も考えられなくもないが、炭等を掻きだす場所としては、なんらの痕跡は留めていない。また時期を決定できる遺物の出土はまったくない。重複するST 5 やSK 8 から時期を想定するならば、ST 5 には大宰府編年Ⅱ～Ⅲ期の遺物が、SK 8 には大宰府編年1A期の遺物を含むため、この木炭窯の構築時期は、大宰府編年1A期以前のもので調査区内の製鉄関連遺構に関連するものとしておきたい。



PL.18 横口付木炭窯



窯内堆積状況



たち割状況



たち割近接

PL.19 横口付木炭窯



たち割状況



近接

PL.20 横口付木炭窯

⑦SR（製鉄関連遺構）(Fig.19～23,PL.21～25)

製鉄関連遺構は調査区内やや西よりのSC24～26の南側集中して検出された。鍛冶炉や鍛冶炉に伴う土坑など13基が検出された。

竪穴遺構や掘立柱建物などの上屋施設を明確に伴う遺構自体を確実に検出できなかった。検出された鍛冶炉の遺存も良いとはいえず、かなり上部が削平や破壊を受けたものが多い。またその位置も整然とした配置にはなく、散逸した状況で検出され、集約的な生産体制を示しているとはいえない。鉄滓の出土した量は少なく、大きさもごく小型のものに限られている。総体的には鍛造を主な作業にした小鍛冶の遺跡の可能性が考えられる。

SR32 製鉄関連遺構では、最西端にある。

斜面側に大きな楠木があり、この樹木の根で破壊されている部分もある。コーナー部のPitや底面に浅い掘り込みがあるため、明確なプランが捉えにくい。大枠1.4mの不整な正方形の範囲をひとつの遺構とした。床面の北側半分には浅いPitや掘り込みが確認できるが、床・壁面が被熱を受けた状況はなく小型の鉄滓が数点と灰が出土しただけである。南西コーナー付近に炉をもち炉内部には灰や焼土が堆積。セメント状の炉壁は5～8cmの厚みを持つ。炉床は西半分が木の根により破壊。炉床の下には被熱した地山が赤変して5～10cmの厚さ遺存する。炉の西側には長軸0.4～0.6m、幅40cmの不整な形の踏み締めによる汚れや硬化の痕跡がある。また炉から20cm東側には西側と同様に0.45～0.55cm前後の楕円形に広がる踏み締めが確認され、炉を挟んで両側から人為による作業がなされた事を示している。

SR34 SC25の南側で検出。Pit25に切られる。平面長軸1.1m、短軸0.8m深さの寸づまりの長方形の土坑状をなす。この遺構の周辺には浅いPitや掘り込みがあるが、SR34に伴うものではなく、単独の土坑状の遺構と考えられる。底面は長軸0.75～0.85m、短軸0.6～0.65mのやや台形の形状をなす。底面は中心部が僅かに窪み平坦でない。ただ床面上の厚さ2～5cmの赤変部分は平坦となっている。壁の立ち上がりは、中ぶくらみや変換点をもち直線的な立ち上がりでない。これら四方の壁には熱変化は見当たらない。東北コーナー

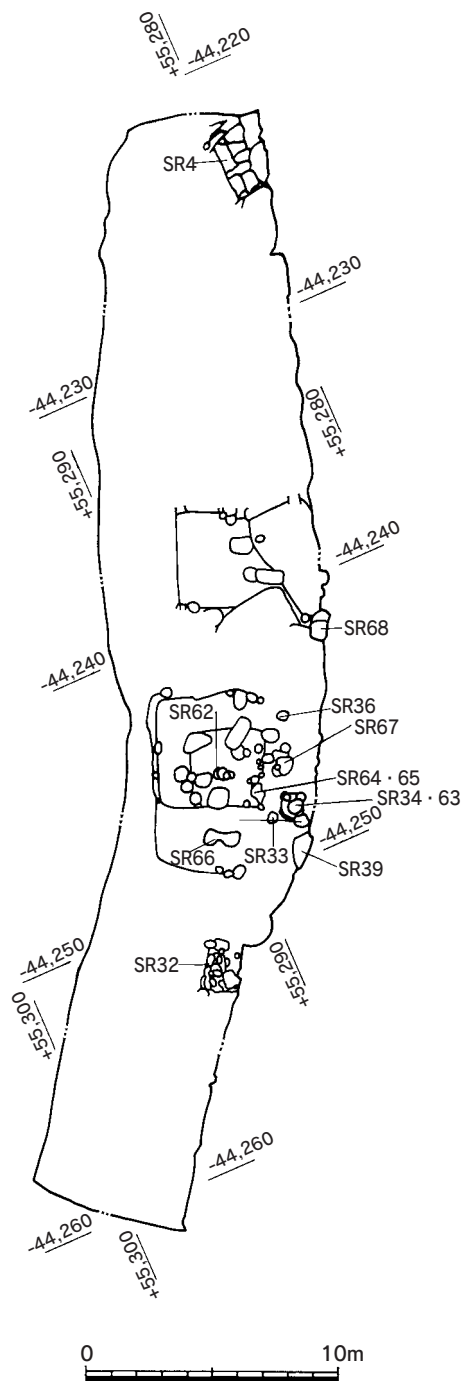


Fig.19 SR関連遺構分布図 (S 1/300)

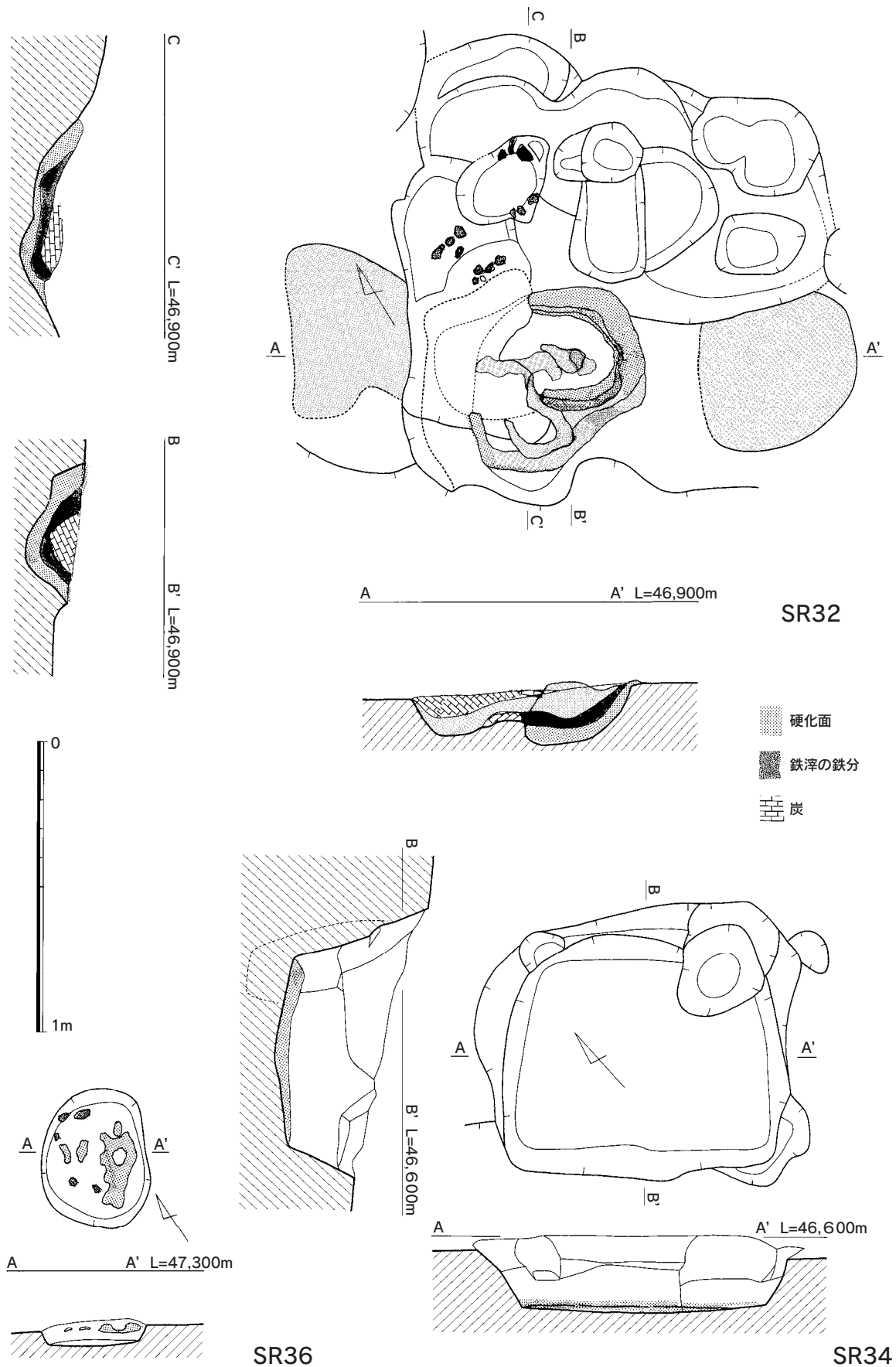


Fig.20 SR実測図-1 (S 1/20)

にあるPitの底面は、赤変した土坑の床面より下まで掘り込まれて灰などの堆積が多かった。用途は不明だが土坑に伴うPitと考えてよいと思われる。出土遺物は土師器甕の口縁付近が1点だけである。(Fig.21-30,PL23) **30**の残存高7.2cmを測る。内外面ともに摩滅が著しく、調整は不明瞭。色調は明赤褐色2.5YR5/8を内外ともに呈す。胎土には角閃石を多く含んで、焼成はややあまい。7世紀の所産と思われる。

SR36 SK30の西側で検出。平面は楕円形の形状をなし、長軸0.5m前後、短軸0.35m、深さ6cm前後と浅い。床・壁・底面には被熱による赤変は見られない。床面は平坦で、壁の立ち上がりはやや直に近い。遺構からは被熱し赤変した土や鉄滓が検出できた。しかしこれらは上面からのみ検出され、下部までには堆積しない。上部がかなり削平されたものと思われる。

SR39 SR34の西側の斜面縁辺で検出。二方向しか壁がないため平面プランは不明。北壁付近に窪み状のPitがあるが、浅い。この遺構自体の壁・床面には硬化や赤変はまったくない。床面は水平な部分と東側から西に斜めになる床で小鉄滓が出土。単独遺構としたが、まとめて再度問題としたい。

SR67 SR34の東側で検出。遺構全体の形状は不整方形を連結させた形状をとる。炉部分は一辺60～65cmの不整方形の平面形状をなし深さ10cm前後と浅く、床面も緩く曲線を描く。東～南壁に赤変した地山が遺存し、一部に焼土化した壁がも確認できる。部分的に粘土による補修を行った可能性もある。底面には厚さ3cmの炭層が堆積するが、本来の西壁の立ち上がりも明確にない。赤変した壁以外には硬化面などまったくなく、内部にも鉄滓などの出土もない。東側の半長方形掘り込みの床面は平坦で、内部には炭や灰の堆積はないが、床の汚れは顕著。



PL.21 SR32



完掘後

PL.22 SR34

SR68 SK16の西側でSK60を切り、縁辺で検出。南壁側がないが平面形は一辺65～70cmの隅丸方形の可能性を持つ。東壁半分の硬化面や赤変した地山は削りとられて

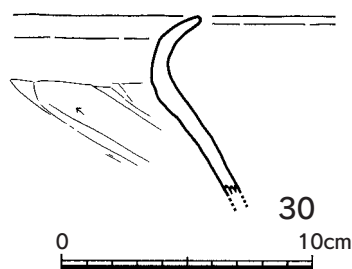


Fig.21 SR34出土遺物実測図 (S1/3)

PL.23 出土遺物

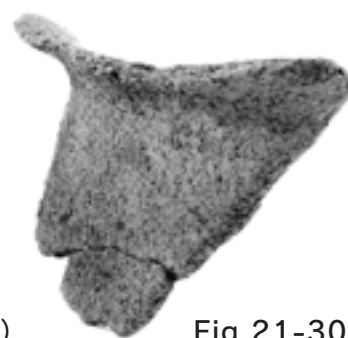


Fig.21-30

ている。壁の赤変は検出上面から深さ25cmの幅を測り、その下から底部に厚さ10cm前後の硬化面が遺存。しかもこの硬化面は底全部には遺存していない。底面は緩やかな曲線を描き5cm前後の炭の堆積を残す。鍛冶炉の下部だけが遺存した可能性が考えられる。

SR62 SC13の中心付近で検出。長さ25cm、幅12cm、深さ7cmの楕円形をなす。SC13のPitを切って検出された。検出された他の遺構より小型で下部に遺構を伴わず、ただ地山を掘り窪めただけの構造で、壁面や底面には粘土の貼り付けはない。底面は3cm前後に硬化、その下の赤変は5cm前後の厚みとなる。周辺部は炭により汚れが目立つが、鉄滓などは出土しなかった。

SR63 SR39の東側で検出した。SR34の上部にあって、径50cm前後の不整円が幅10cmのテラスで接続する。この円形の掘り込みは、ともに15cm前後の深さをもつ。西側掘り込み内硬化面は底面より5～7cm上にあって長さ15～20cmの楕円形をなし、3cm前後の厚みを測り、周辺部は10～15cmの幅で地山が赤変している。また東側内の硬化面は底面より5～7cm上にあり、径28～32cm、厚み5cm前後の楕円形を呈す。これは、地山が硬化したものではなく鉄分が凝固したものである。この東側の北には長さ1.1m、幅60cmを測る楕円形の地山変化が確認できる。ここには掘り込みはなく、一部に炭や焼土があるが、他は汚れによる踏み締めが顕著である。明らかに東西の掘り込みには用途の違いがあるものと思われる。下部にあるSR34と別遺構としたが、まとめの項で同遺構として考えた場合を述べてみたい。

SR33 SR34の北側で検出。東側にある長さ40cm、幅35cmの楕円形Pitと北側Pitに切られる。SR33の平面形は50～62cmを測る隅丸方形の形状に炉が附設したものと思われるがPitと重複するため不明瞭。この外形平面プランは踏み締めによる汚れが顕著で、床面は平坦な浅い掘り込みとなり、南側に不整円の炉をもつ。外形の掘り込みには炭や灰・鉄滓の出土はない。炉は断面播鉢状の掘り込みをなし、炉底は深さ10cm前後と外形よりも深い。径40cmの円形の形状をなし、炉壁の縁辺を8～10cmの幅で赤変した地山が巡る。また内部の壁・底面も掘り込みに沿って赤変しているが、硬化面は内壁の一部分だけがセメント状に硬化しているだけである。底面には硬化面はまったくなく、炭や灰もない。SR63と比較すると炉の規模が小さくなるため、一連の遺構とは考えず、別遺構として扱った。

SR66 SC26の中にあって、SR33の北西側で検出。径50cm前後の不整円が連結した形状をなす。遺存状況は悪く、深さ4cm程度の掘り込みとなる。床面は平坦だが床下

には不整円のPitがある。Pitの埋土は床と同様である。北東側の掘り込み床上には埴塙上の硬化面があるが、厚みは1cm程度と残りは悪い。その硬化面に沿うように3cmの厚さの赤変した地山を検出した。南側Pitの床面は平坦で深さも北東側Pitと同じ深さとなる。床には硬化面はなく、赤変した地山が両Pitの境付近に散らばっていた。また遺構内部よりも周辺部に炭や灰が散らばり、地山の汚れや踏み締めが顕著に見られた事から平面プランはもっと大きなものであった可能性がある。

SR64 SR33の北東、SC25の中央付近で検出。小規模な炉跡。北東側の鍛冶炉は重複したPitの上面に長さ45×27cmの不整な楕円形に赤変した地山だけが遺存している。赤変した地山以外のプランや規模は明確でない。

SR65 SR33の北東、SC25の南西コーナー付近で検出した小規模な鍛冶炉。炉の平面プランは、50×80cmの不整な楕円形をなす。西壁側と南西壁側に長さ20cm程度のPit

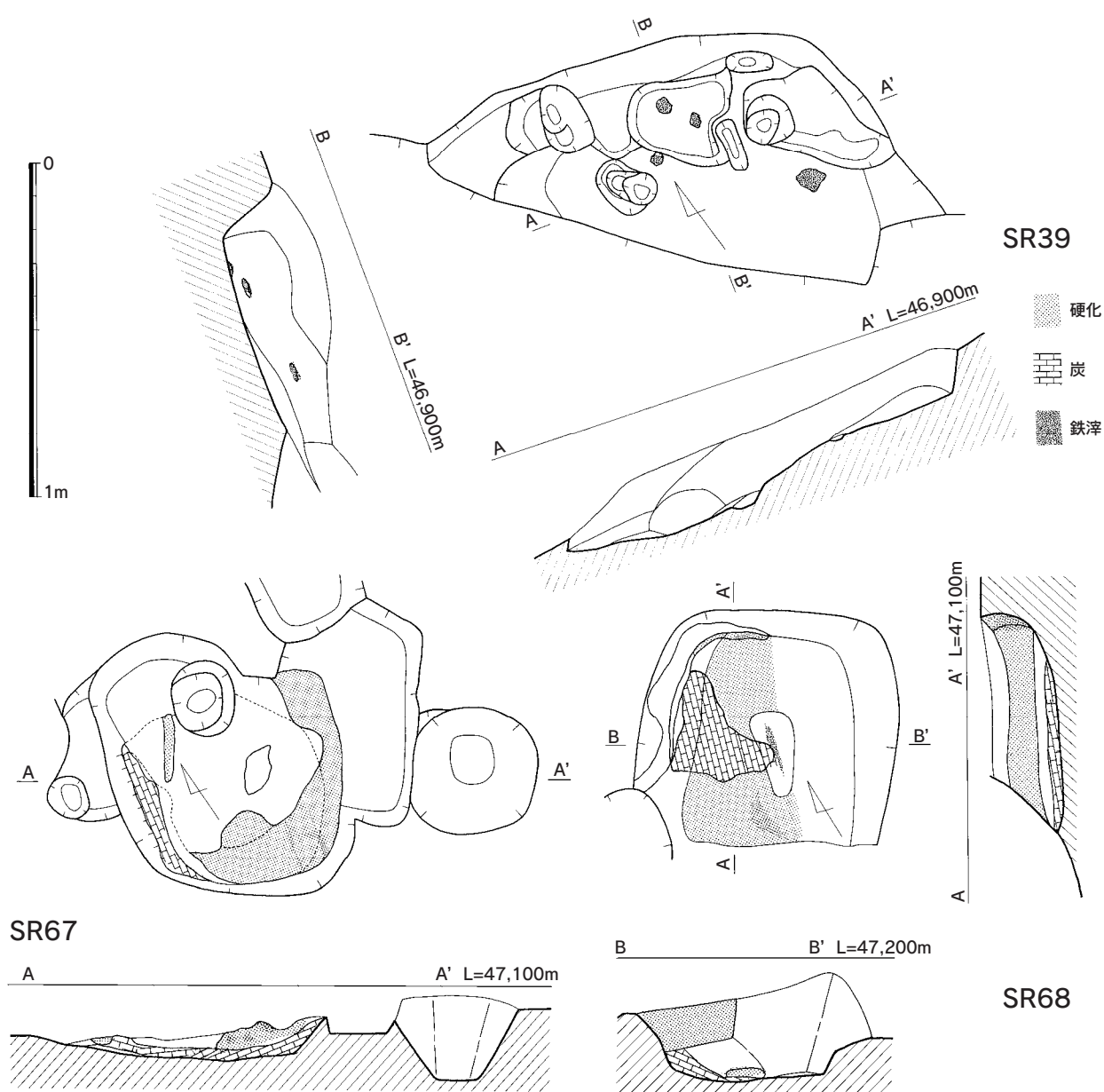


Fig.22 SR実測図-2 (S 1/20)



SR39



SR67



SR67 近接

PL.24 SR

状に突き出た窪みを2個持つ。地山を掘り窪めただけの炉で、断面形状は中心部が深さ6cm前後を測るU字状となる。その掘り込みに沿って地山が6cm前後赤変している。赤変の上面には厚さ1cm程度の硬化面があるが遺存状況は悪い。

以上12基の鍛冶炉および土坑に伴う遺物は殆どなく時期は確実でない。峰畑遺跡1～4次調査で検出された製鉄遺構関連を包括し、時期や生産体制については考える必要があろう。

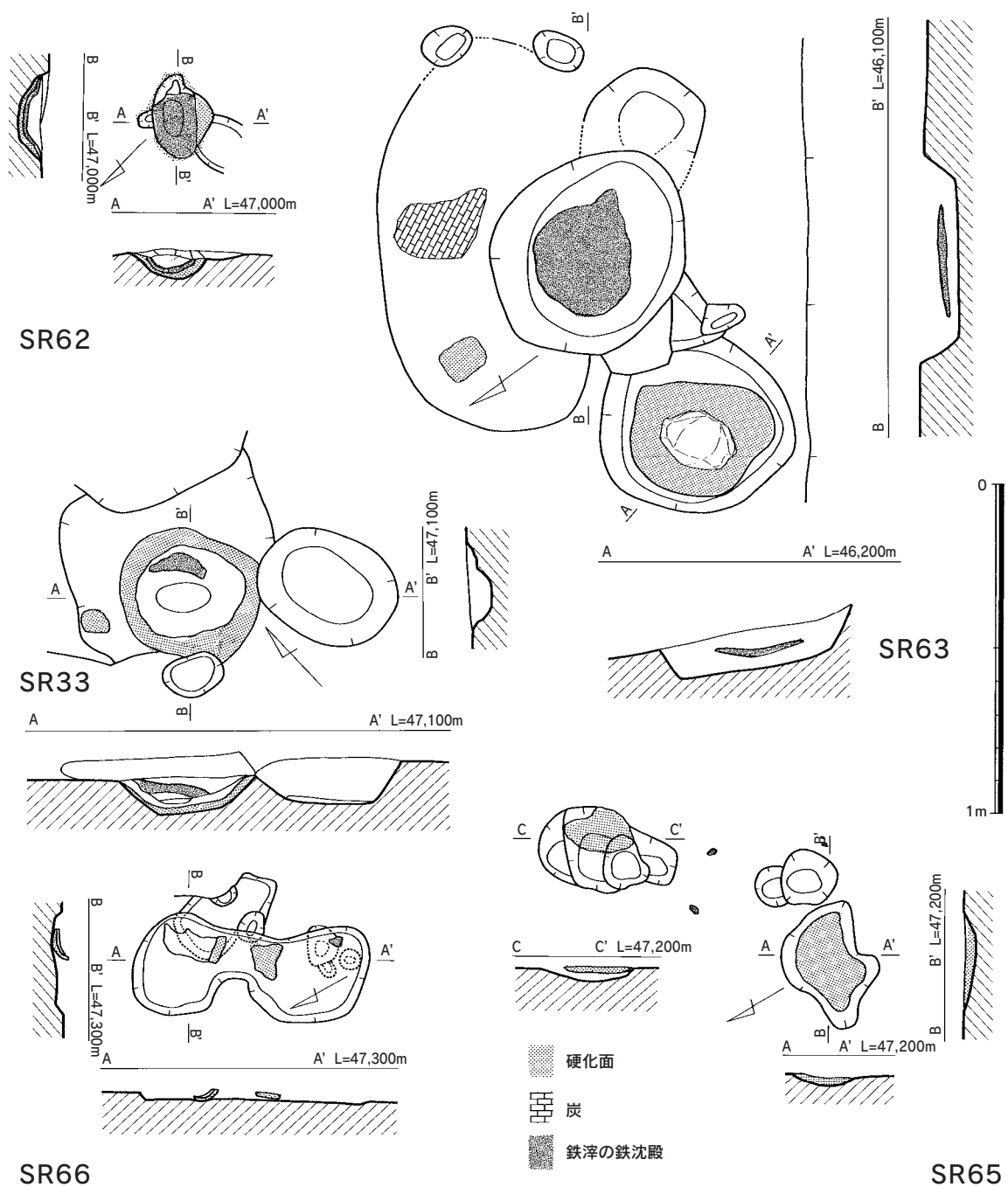
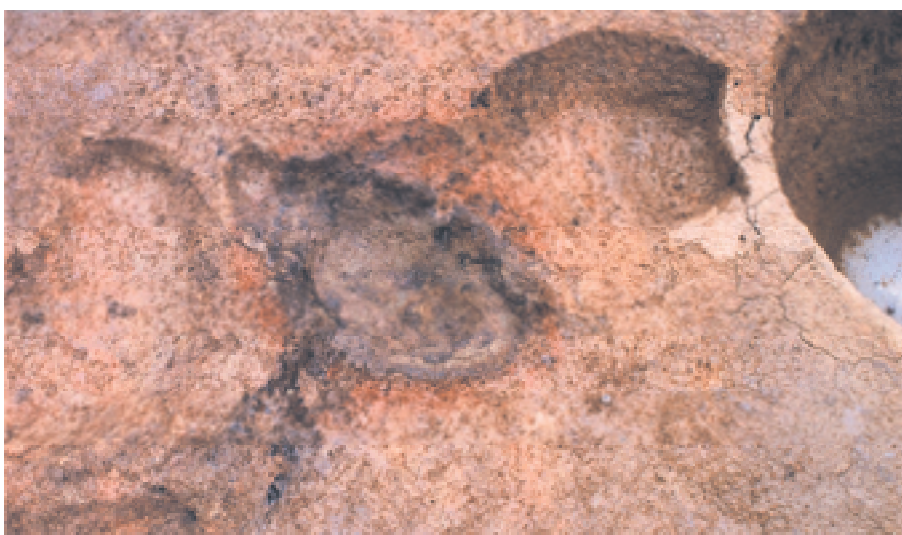


Fig.23 SR実測図-3 (S 1/20)



SR68 完掘状況



SR62



SR63

PL.25 SR

4. まとめ

今回の調査では、生産遺構・墓などが検出された。なかでも形態的に興味深いST49の墓が検出できた。ここではST49についての補足を述べておきたい。たびたび目にした福岡県教育委員会報告書の馬田弘稔氏による「地縄張り」や「建物配置計画」の論に興味を持ち馬田氏より指導・助言を頂いた。その指導・助言を基にST49の企画について考えたもので、馬田氏の論を完全に理解しきれていない稚拙な補足文の可能性を残している事は否めない。

また生産遺構の鍛冶炉・横口付炭窯が検出され、個別の説明を行ったが、なかでもSR34・63についての補足をし、この遺跡の所在する丘陵全体を考えるうえでの問題として上げておきたい。

ST49の設計計画について

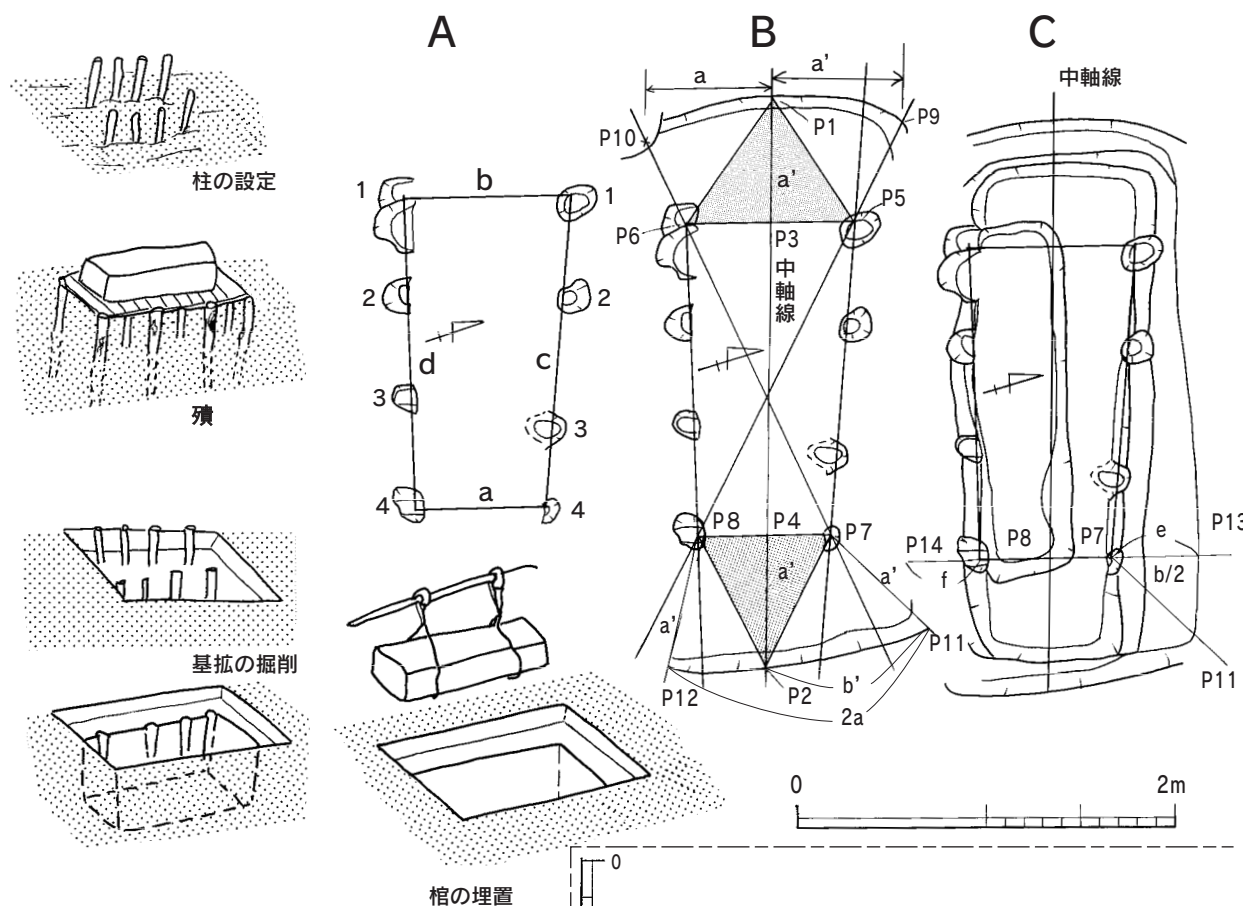
個別の項で述べたように、12基検出された墓のなかでも、ST49は特異な形態を持つ墓といえる。墓坑内で検出した**対になる軽易な柱跡**（以後柱）に注目し検討を始めた。Fig.24-A、d列柱は安置する棺の邪魔になり、それらは棺が安置された時には不必要な柱である。次に棺安置のための足場と考えると足場を墓坑内部に設置する不合理などの問題があり、埋葬時や埋葬後には必要でない柱と考え、これらから対の柱の存在は埋葬前に必要な柱であったと考えた。しかしこのような柱を伴う墓の調査事例を調べたが現在のところ近隣や県内には事例はなく、短絡的ではあるが殯を想定した。

7世紀後半代に出された「大化の薄葬令」以後殯は営まれていないが、地方には及んでいず、依然として「薄葬令」の規定を超える墓の築造がされていた。

また大宝二年には火葬の風習が広まり火葬墓による埋葬が行われるようになって、中央から任官された官人の墓は大宰府周辺でも発見されて、峰畑遺跡の周辺にも「米嚙火葬墓・峯火葬墓・結浦火葬墓」などがある。公には殯の風習は皆無に等しい時代であるが、ST49は地方豪族の私的な埋葬墓の可能性もある。ST49が殯の柱を附設した墓坑であれば、上屋が存在した可能性も考え、上屋に伴う遺構を探すことに努めたが、遺構の重複もあり確実に附設する遺構は捉えられなかった。

次にST49の墓坑と柱列から以下のように考えた。Fig.24-Aで示されるように柱間の長さa列=2.4尺、b列=3尺、c列=d列=5.5尺（1尺を0.296～0.3に換算し数値化）を測る。対とは云え北側c列の柱跡は、筋の乱れや掘り方や大きさ、柱間の距離にバラツキがある。一方d列は筋・掘り方・柱間が一定している。埋葬位置確定後d列柱を次にc列柱を打ち込み安置する棺の台座を構築し、殯の期間の台座柱とした。殯終了後、d列柱を基準として墓坑を掘り込み、柱を除いて棺を安置し埋葬終了させる。Fig.24略図に示す様に棺を殯の期間置く台座の軽易な柱と考えると対の柱が、存在する意味が理解でき、ST49は殯の台座になる柱をもった墓として捉えられる。

この墓坑はSC19に切られていたが、SC19の床面は汚れが目立つ。しかし殆ど地山に近い色で僅かに重複した遺構の存在を感じた。またST49の検出面の層と内部の層序に、ほとんど違いは見られず、ちょうど甕棺埋葬時のように一気に埋め戻された埋土となっていた。墓坑の掘り込みから埋葬まで時間差のない埋め戻しであった事を示している。



以下の説明では、基準となった柱と墓坑の設計についてFig.24A-B-Cに示す。柱間をそれぞれa～dで、また交点については、P1～P13で表記した。a・bの中軸線上にP5・P6の交点を求めるとP1となり、P1～P3の距離はa(2.4尺)つまり東短軸の距離に一致する。また同様に中軸線上にP7・P8から求めた交点はP2になり、P2～P4の距離はa(2.4尺)に一致する。西側のP1～P5～P6はP1を頂点とする二等辺三角形となる。このP1を基点としてa(2.4尺)の数値で対角線との交点を求めるとP9およびP10になり西北・西南の墓坑のコーナーに合致する。(P10に関しては、遺構が重複しているため推定とした。)ここでもP1を頂点とするP1～P5～P9やP1～P6～P10の三角形が形成される。次に東側

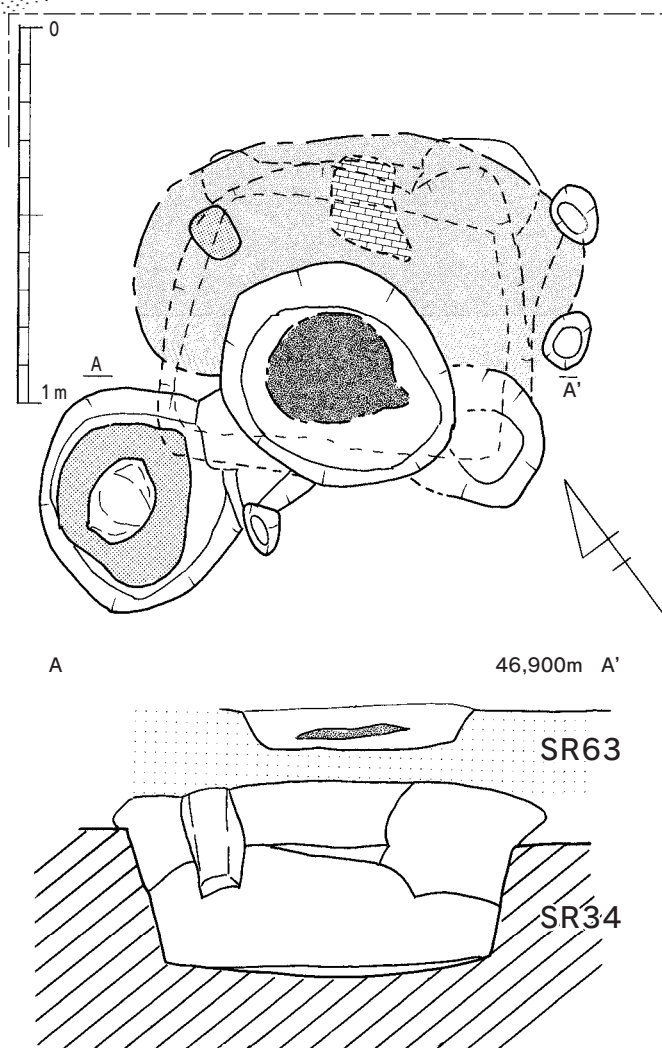


Fig.24 ST49設計想定図及びSR63・34実測図 (S 1/20・1/40)

は、中軸線上にP7とP8の交点を求めるとP2となり、やはり二等辺三角形が形成され、いずれの三角形の一辺には、必ず $a \cdot b$ の長さを用いている。また北東コーナー部位置については、P7を基点とし、 a の距離とP2を基点とした b の距離の交点を求めるとP11となり、このP11がコーナーに合致する。次に南東コーナー位置は、P8を基点とし a の距離とP11から $2a$ 分の距離の交点を求めるとP12となる。あるいはP8を基点とした a の距離とP4を基点とした b の距離の交点は、P12となる。このP12は、東南のコーナーとなる。俯瞰した墓坑は整った隅丸長方形の形状をなすが、この墓坑は $a \cdot b$ の中軸線上では左右対称とはならない。これは当初の柱の設定に起因する。次に墓坑下端の幅＝長さの設定には、 a の延長線上P7～P13= $e=b/2$ とP8～P14= $f=a/2$ となり、P13～P14= $a+b/2+a/2$ で長さ設定している。中段の掘り込みの設定は当初のC・d列柱の長軸に沿って掘り込むが、下段の棺底位置はd列の柱に沿い中軸線上が棺底北側下端のラインとしている。この様にST49の掘り込みに関しては、馬田氏の提唱される「地縄張り」「建物配置計画」などの基準となる設計が用いられていると理解できる。

SR34・63について

別遺構として個別で説明を述べたが、SR34がSR63の下部施設の可能性を考えてみた。同一の遺構とすると今回検出された他の鍛冶炉とは機能を別に考える必要があり稿をおこした。二つの遺構はSR63の踏み締めた汚れた範囲にSR34の三方の壁（北・東・西）がほぼ重なり、SR34との間には8cm程度の空間しか存在しない。南壁側には炉床が重なる。ただ炉床の掘り込みとSR34の検出面とは10cm前後の空間が存在し、その堆積土には煤・炭・灰などが含まれてなく、炉床部分がSR34には半分程度が重なるだけで、炉が下部SR34の中心部からやや外れていてSR34内埋土にも炭・真砂土が交互に版築された様子はなかった。底面は2～5cmの厚さだが赤変していたが、壁面には赤変は見られなかった。上面にも赤変した埋土はなく、下部施設とするには、やや充分でない気もするが、遺構の重なりから同一と考えてみた。

従来云われているように下部構造は、鍛冶炉周辺の湿気を取り除き、より高い炉内温度を確保、それを維持することを目的として構築されている。殆どが近世大鍛冶に見られるもので古代における調査例は、かなり少なく特殊な形態の炉と考えられている。県内の調査例として福岡県糸島郡志摩町御床松原遺跡があげられるが、この遺構は炉壁に粘土を使用しない点はSR34と共通し、SR34・63の遺構の重なりからみて、この特殊な形態の鍛冶炉のひとつとして捉えられる。

今回検出した鍛冶炉を調査区全体で見ると検出されたSR34・63以外の鍛冶炉の規模は20～40cm前後と最小型や小型の鍛冶炉として分類できるものである。しかしSR34・63の鍛冶炉は径50cmと分類上は中型だが、この遺跡のなかでは大きなものや機能の違いの炉として捉え、最小型や小型の鍛冶炉を鍛錬鍛冶炉とするならば、SR34・63については大型ではないが、精錬鍛冶炉として理解しておきたい。

参考文献

日本古代鉄器生産の考古学研究 榊原水社 安間拓巳著

報告書抄録

ふりがな		みねはたいせき だい5じちょうき						
書名		峰畑遺跡 第5次調査						
副書名								
巻次								
シリーズ名		筑紫野市文化財調査報告書						
シリーズ番号		第93集						
編集者名		渡邊和子						
編集機関		筑紫野市教育委員会（教育部・文化振興課 文化財担当）						
所在地		〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1 TEL.092-923-1111(代)						
発行年月日		西暦2009年 3月 27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みねはたいせき 峰畑遺跡	福岡県 筑紫野市大字 峰畑	402176	70	33° 29' 45	131° 31' 26	1999.10.04 ～ 1999.11.05	308m ²	供養塔建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
峰畑遺跡	墓地 製鉄関連遺構	古墳時代 奈良時代		土坑墓 横口付木炭窯 鍛冶炉		弥生土器 土師器 須恵器		

峰 畑 遺 跡
第5次調査
筑紫野市文化財調査報告書
第 93 集

平成21年3月27日

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会
〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1
TEL 092-923-1111(代)
FAX 092-923-9644

印 刷 信 光 社 印 刷 (有)
福岡県朝倉市一本32-1